

第5章 上福岡貝塚の調査

I 遺跡の立地と環境

上福岡貝塚は、武蔵野台地北東部の標高16.0～17.0mに位置する。台地裾部の荒川低地には、北から東に新河岸川が流れる。遺跡をのせる武蔵野段丘面と荒川低地の現比高差は約9～10m、新河岸川の水面からでは約12mの急崖を成す。南側にはかつて新河岸川に流れ込む小河川が東流し、河川が形成した立川段丘面に緩やかに傾斜する。周辺の遺跡は、北側に縄文時代前期集落の川崎遺跡と中期集落のハケ遺跡、東側には前期古墳の権現山古墳を含む権現山遺跡（古墳群）が隣接する。上福岡貝塚は1917年に安部立郎氏により紹介され、学史に残る著名な遺跡として世間に広く知れたのは、1937(昭和12)年の山内清男、関野克両博士による発掘調査と調査成果をもとにした研究報告等の功績によることは周知のとおりである。この調査で縄文時代の貝層を伴う住居跡24軒の内8軒を検出、古墳時代とみられる住居跡（竈跡）6軒、古墳4基も確認している。1992年奈良国立文化財研究所から、1994年・1999年には上福岡市教育委員会から上福岡貝塚に関する報告書と市史が刊行されている。

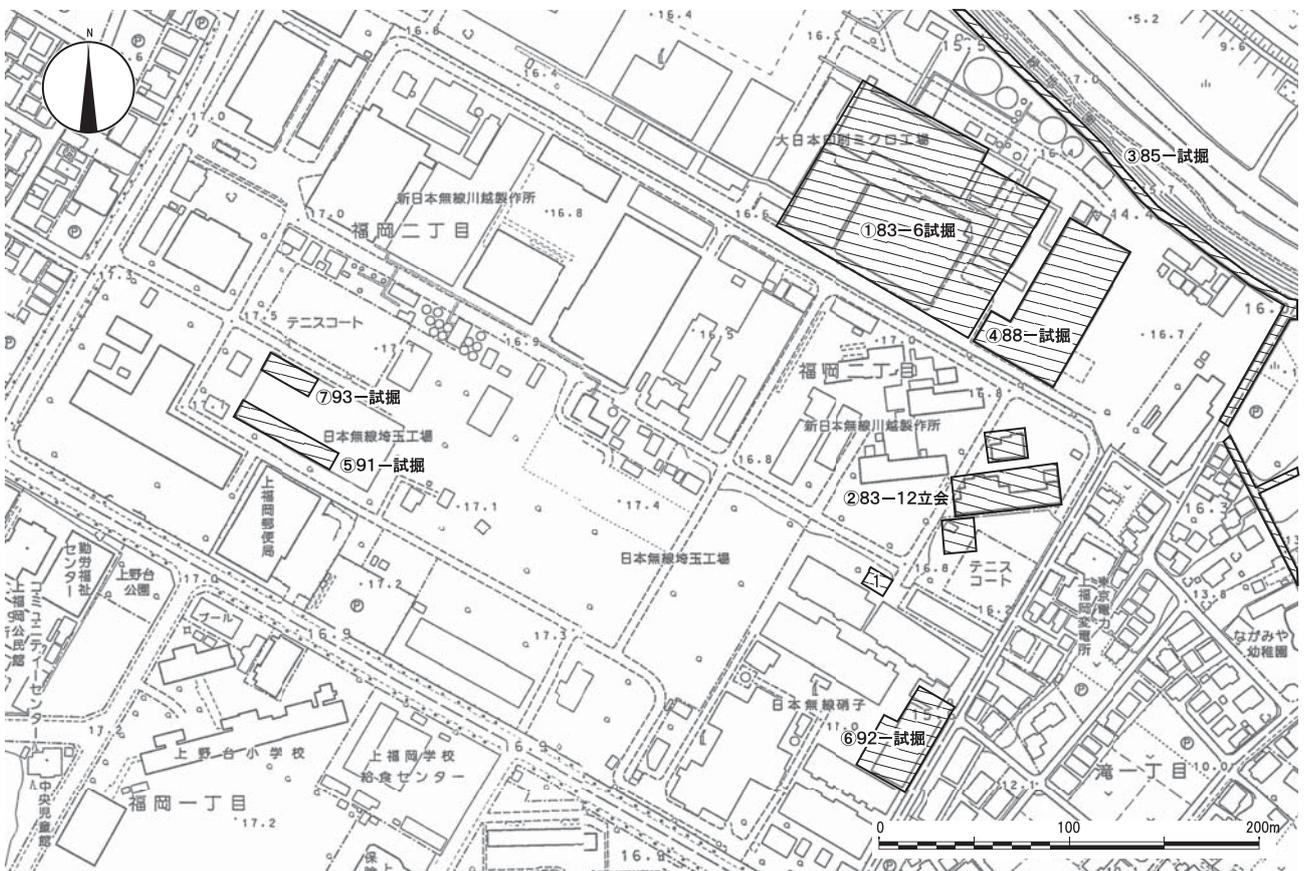
II 上福岡貝塚第1地点

(1) 調査の概要

調査は変電設備を格納する建物の増設に伴うもので、原因者より2007年4月10日付けで「埋蔵文化財事前協議書」がふじみ野市教育委員会に提出された。

申請地は遺跡範囲の南東部に位置しているため、申請者と協議の結果、遺構の存在を確認するために試掘調査を実施した。

試掘調査は2007年4月26日から、開発区域北側部分の5.5×11mを重機による表土除去後、人力による表面精査を行なった。表土除去の重機は、原因者の新日本無線(株)のご好意により提供を受けた。試掘調査の結果、縄文時代前期の貝層を伴う住居跡2軒・縄文時代の集石土坑1基・時期不明の堀跡1本の他、旧日本陸軍の造兵廠東京工廠福岡工場（以下火工廠）の遺構等を確認した。住居跡等の遺構は西側と南側に延びていた。確認面までの深さは70～100cmであるが、掘削・地盤改良が地表面下180cmに及び遺跡に影響を与える為、2007年5月21日から6月12日まで本調査を行なった。本調査の成果は、第II部第2章に掲載した。



第10図 上福岡貝塚の地形と調査区 (1/4,000)

(2) 遺構と遺物

①水溜

調査区の中央部でコンクリート製の水溜を検出した。平面は円形で、円筒型を呈し西側の上面部に幅12cm、深さ6.7cmの凹状の受けを設ける。水溜本体の規模は、上面外径2.73~2.8m、内径2.45~2.55m、上面から底部内面までの深さは1.982mである。側面外壁にはコンクリート成形時の木枠痕が残り、コンクリート内部には直径約10mmの鉄筋が多数使用されている。水溜を埋設する為の掘り方は、直径約3.8mのほぼ円形を呈する。

水溜の周辺にはコンクリート製の防護柵を埋設するためのピット(本来6本有)が4基(P1~4)検出された。規模は第12表のとおりである。

②不凍消火栓・配水管

調査区内南西部の壁沿いに、南西から北東に延びる配水管とそれに接続する消火栓を検出した。

1は鉄製の地上式双口型不凍消火栓本体である。ほぼ完形であるが、消火栓角ボックスハンドル(上部を回すハンドル)、口元キャップ(放水口のカバー)、キャ

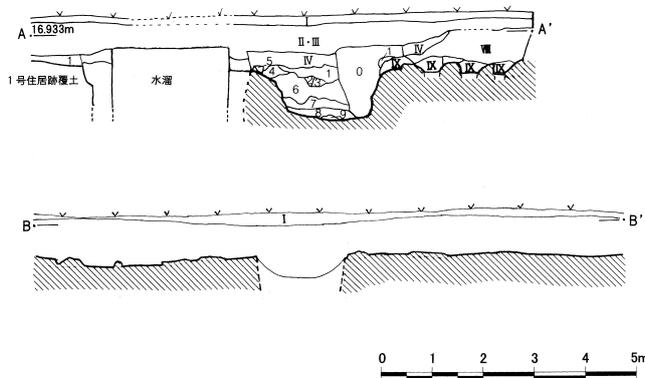
ップを本体に繋ぐ鎖等はみられない。正面に、「特許 ◊CEC◊ 自動 不凍消火栓」の刻印がみられる。双口の間に黒色の文字らしきものが見られるが判読出来ない。

2は鉄製配水管で、外径120mm・内径100mm、長さは調査区外へと延びており不明である。配水管外面と接合部らしき部分の2ヶ所に「⊕100×100=250 ●●昭和十三年」と「⊕●●昭和十三年△オ」の刻印がある。また本管と消火栓を結ぶ乙型継手管部分には「⊕100×90●●昭和十二年△」の刻印がある。本体中央部2ヶ所のフランジと、本管と乙型継手管を結ぶフランジは4ヶ所のボルトで固定されている。「CEC」は、(株)建設工業社の社章で、現在も消防設備を取り扱われている。

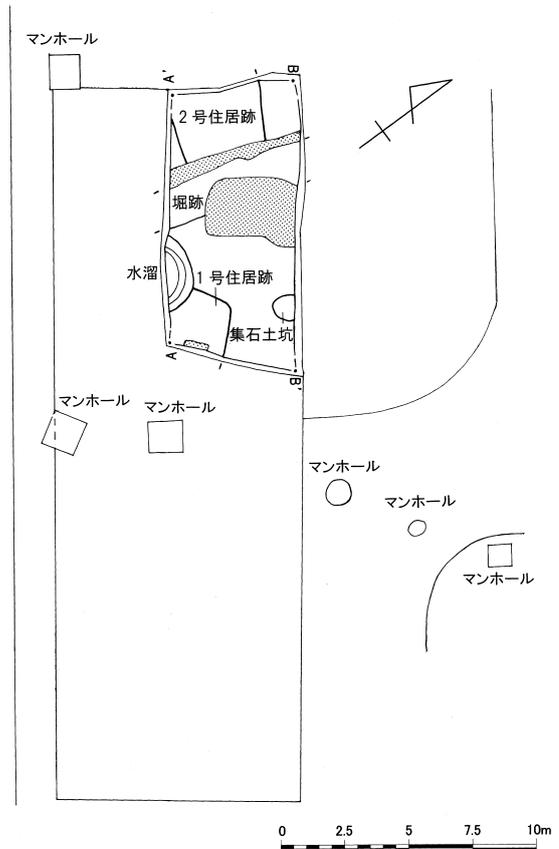
第12表 上福岡貝塚第1地点水溜ピット一覧表

(単位cm)

No.	平面形態	確認面径	底径	深さ	備考
1	不明	(48)	(36)	66	
2	楕円形	57	52	37.8	
3	円形	(55)~75	(50)~58	52.3	
4	円形	68~75	48~52	56.3	



- I. 現表土 駐車場砂利砕石
- II. ローム主体盛土(戦後の盛土)に黒色土含む
- III. 黒色土主体盛土 締り強、粘性有、2cm以下ローム多量含む
- IV. 黒色土主体盛土 締り弱、粘性有、1cm以下ローム少し含む
- V. 暗褐色土 締り強、粘性有、10cm大ロームブロック多く含む
- VI. 黒色土 締りやや弱、粘性有、2mm以下ローム粒多く、礫少し含む
- VII. 黒色土 締りやや弱、粘性有、1cm以下ローム多く含む
- VIII. 黒色土 締り弱、粘性有、2mm以下ローム粒多く含む
- IX. 黒色土+暗褐色土 締り弱、粘性有、ローム土と黒色土を斑状に含む畝跡(旧耕作土)
- X. 暗褐色土 締り強、粘性有、10cm大シミ状ソフトローム、ローム粒もシミ状に極少し含む
- O. 攪乱
 - 1. 黒色土 締り強、粘性有、2mm大ローム粒少し、1mm以下ローム粒多量含む
 - 2. 黒色土 3層ベースでややローム粒少ない、木根痕か?
 - 3. 黒色土 2mm大ローム粒少し、1mm以下ローム粒1層程度含む
 - 4. 黒褐色土 3層よりやや明い、ローム粒ほぼ同程度含む
 - 5. 暗褐色土 シミ状黒褐色土含む、ローム粒ほとんど含まない
 - 6. 黒褐色土 3mm以下ローム粒多量含む
 - 7. 黒褐色土+褐色土 黒褐色土ベースに5mm以下ローム粒多量含む、6層よりローム粒多い
 - 8. 褐色土 ポロポロするが、ほぼ地山ロームブロック
 - 9. 暗褐色土 ロームブロック(BB IIブロック)



第11図 上福岡貝塚第1地点試掘調査区域図(1/300)、土層図(1/150)

第2章 上福岡貝塚第1地点の調査成果について

I 上福岡貝塚縄文時代前期住居跡の配置について

(1) はじめに

上福岡貝塚では1937(昭和12)年に山内清男、関野克両博士が中心に縄文時代の住居跡24軒(A~X地点 竪穴住居址)を確認し、このうち前期の住居跡8軒(C・D・F・G・I・J・K・M)の発掘調査を行なった。8軒の概要等については第109図と第93表のとおりである。残る16軒については、住居跡の存在を確認しただけで検出は行っていない。その後、今回の第1地点の調査まで縄文時代の住居跡は確認されていない。

今回、第1地点の調査で検出した2軒の住居跡は、過去に検出した痕跡が見られないことから、先の8軒の住居跡と明らかに異なる。残る未検出16軒の住居跡との関係について、上福岡貝塚の集落や貝塚の配置などを考える上で検証してみたい。

(2) 1937(昭和12)年青焼図「地形測量(住居址配置)図」と第1地点1・2号住居跡

山内・関野博士が確認または検出した住居跡の配置について、これまでに以下の4種類の配置図面が確認されている。

- a. 山内清男博士の1965(昭和40)年『郷土史料』第2集と1967(昭和42)年『山内清男・先史考古学論文集』第2冊に掲載された「福岡構内石器時代遺跡発掘調査報告」にある、「埼玉県入間郡福岡村大字上福岡 昭和十二年一~七月」と記載された図(以下「山内図」と呼ぶ)。
 - b. 関野 克博士の1938(昭和13)年『人類学雑誌』第53巻第8号、1965(昭和40)年『郷土史料』第2集に掲載された「埼玉県福岡村縄紋前期住居址と竪穴住居の系統に就いて」に記載された図「第1図上福岡遺跡図」(以下「関野図」と呼ぶ)。
 - c. 福岡村郷土史刊行会の1957(昭和32)年『福岡村市』に掲載された「旧火工廠内竪穴住居跡及貝塚発掘地点(○印)図」(以下「福岡村史図」と呼ぶ)。
 - d. 笹森健一の「教育委員会に保存されていた資料について」1994(平成6)年市史調査報告書第5集『考古文献資料(1)上福岡貝塚』上福岡市教育委員会刊行で報告された青焼図「地形測量(住居址配置)図」(以下「白石青焼図」と呼ぶ)。
- a~d各図の出自や概要については笹森健一「教育

委員会に保存されていた資料について」註(2)が詳細に述べているのでそちらを参照されたいが、それぞれの図の特性を再認識した上で、あらためて住居跡の配置をみてみたい。

笹森の検証でも、山内図および関野図は白石青焼図からの派生図であり、福岡村史図は関野図からの派生図であることが分かる。従って全ての基となったのが白石青焼図であり、1937年調査の遺構配置を考える際に、白石青焼図に山内図を重ねたものが、現段階では最も正確に遺構配置を記録したものと考える。また、1992(平成4)年に奈良文化財研究所が刊行した『上福岡貝塚資料』山内清男考古資料3に掲載されている図「上福岡貝塚周辺の発掘調査成果」は、山内図に刊行時の現況図を重ねたもので、山内図の派生図と考え今回の参考資料からは除外した。

白石青焼図は地形図に火工廠の区画配置などを重ねて作成しているため、図中に記されたA~Q地点住居址の配置が最も正確であると考えられる。白石青焼図と山内図を同一縮尺にして重ね合わせてみると、僅かなずれがみられ、山内図は白石青焼図を完全にコピーしたものではないと考えられる。山内図がどの時点で白石青焼図を写したのか不明であり、R~X地点住居址、a~ε地点住居址の他に東側2基の古墳がどのような基準で追加記載されたのか現時点では確認出来ない。しかし昭和12年という時代と調査の背景などを考え併せるならば、両図の記録資料としての信頼性と価値は高く、同時期の他の発掘調査における記録図などと比べても、両図の精度は群を抜いていることは周知のとおりである。

白石青焼図・山内図と第1地点の住居配置を現在の都市計画図に重ね合わせたものが、第108図上福岡貝塚遺構配置図である。1・2号住居跡はGとW地点住居址の間に位置する。G地点住居址は発掘調査が行なわれ遺構写真や図面記録も有り遺物も出土しているため今回検出したものと明確に異なる。W地点住居址は未検出住居址16軒のうちの1軒で、図面上では1・2号住居跡と5mほどの範囲内にある。白石青焼図に山内図からS・T・U・V・W・X地点住居址を加えた図が第176図である。註(9)

【W地点住居址=1号住居跡の可能性】1号住居跡は覆土上層の遺構確認面付近に土器片が多数出土するが

貝層は全くみられない。貝層が確認されるのは覆土中層から床面付近にかけてである。ただし、火工廠の水溜や消火栓・排水管に掘削され、当時も住居跡と認識されていた可能性があり、工事が着工されている状況で発掘調査の対象から外されたものとも考えられる。上福岡市史編集専門員であった川名広文氏が、調査に参加された慶応義塾大学名誉教授(聞き取り調査時)の江坂輝彌氏への聞き取り調査でも「関山式ないし黒浜式の貝層のない堅穴も何軒かあった」と述べられている。註(10)

【W地点住居址 = 2号住居跡の可能性】 2号住居跡は遺構確認面から貝層が確認され、さらに火工廠工事以前の耕作でも貝層が多数掘り起こされている事が今回の調査で明らかとなり、当時から住居跡として認識されていた可能性は高い。

以上のように1937年の調査で確認されたW地点住居址と今回調査した住居跡の関係については、周辺部のより広範囲な調査を見なければその特定は難しい。

(3) 1937(昭和12)年発掘調査の状況

1937年の発掘調査について、調査に至る経過や調査の経過・成果は両博士の報告や論考と、上福岡市史編纂事業にともなう各調査でも詳細が明らかになりつつあるが、白石護郎氏が作成した住居址配置図から新たな様子が読み取れる。

1937年の調査で、なぜ8軒(C・D・F・G・I・J・K・M)の住居跡が検出されたのか、山内博士が1937(昭和12)年4月3日に当遺跡を訪れた時点で、A～GないしH地点までの住居跡が確認されていたことが白石青焼図から読み取れる。A～Q地点住居址名の下に記された記号(1、20・1、24～6、17など)と「福岡構内貝塚出土品 昭和一二年一月二十五日」の遺物写真に縄文土器・石器・貝殻が撮影されその下にC～E・Gの記号がある。1937年1～2月の時点でG地点住居址まで確認されていたことが分かる。

検出された8軒の住居跡を白石青焼図でみると、全ての住居跡は火工廠の防爆土塁の外側に位置し、S～U地点住居址の3軒も建物の構造をみると基礎部分から外れていた可能性が考えられる。即ち火工廠は同年12月25日の開場式に向け工事を急いでおり、建物建設に並行して発掘調査が行なえるのは、建物間の狭間や道路部分に限られていたものと推察される。今回第1地点調査区の土層断面に防爆土塁の築造痕跡が確認され、それをみると防爆土塁の築造部分は土を削らずに

土盛されている。つまりその下部に存在する遺跡については当時も確認されず、未発見の遺構が存在する可能性が考えられる。川名広文氏が指摘註(10)したとおりに今回新たな遺構と遺物が発掘された。第1地点発掘調査時に周辺状況を観察した限りでも、建物の隙間や道路の他に火工廠時代の木造建物も残っており、これらは基礎もそれほど深くないものとみられ、遺構と遺物が存在する可能性がある。以上の点から、上福岡貝塚は遺跡として健在であり、今後も開発行為などに十分な対応をとると共に、新たな調査成果に期待したい。

II 上福岡貝塚第1地点出土土器について

上福岡貝塚第1地点出土の縄文時代前期の土器について概観してみたい。

今回の土器分類は、隣接するG・W地点出土土器との比較・検討も考慮し、奈良文化財研究所史料 第33、『上福岡貝塚資料 山内清男考古資料3』の分類基準を用いた。山内資料の黒浜式土器などの分類基準は、複数地点住居跡の土器に対し設けられたものであるため、若干の変更を以下のとおり行なった。

第1類第1種を有尾式とし、第2種に渦巻文を有するものを加え、第5種の格子目文をa～cに細分。

第4類貝殻文土器群を第1種貝殻背圧痕文と第2種貝殻腹縁文に分け、さらに第1種をa・b・cに細分。

第8類には甲信系土器を新たに追加。

(1) 1号住居跡出土土器について

出土土器は総数2,271点で、復元可能な個体数は10点(第115～116図)である。数量的には第2類土器が最も多く次に第1類、第4類、第8類土器と続く。第2類土器群の破片には第1類土器群の胴部片なども含まれるため単純な比較は出来ないが、復元個体数でみるならば第2類第4種の付加条縄文がやや目立つ。

分類種別でみると、第1類土器群では第1種と第2種の口縁部に鋸歯状文(菱形文)もつ類で、工具による爪形文はやや少なく半截竹管状工具を用いた沈線文が多い。山内博士の調査した住居跡と比べると黒浜式土器の多く出土したJ地点住居址出土土器に類似する。D地点住居址出土土器は、第1類第4種の口縁部文様帯に半截竹管状工具による幅狭の杵状区画文を配する土器や、第1類第6種のコンパス文を含む土器を含む点で1号住居跡と様相を異にする。また、同じ黒浜式期の住居跡である川崎遺跡第4次調査第1号住居跡は、

有尾式土器の復元個体は無く破片での比較であるが、沈線文より爪形文が多い傾向がみられる。

第2類土器群では、口縁部に工具による菱形文を配する有尾式土器の胴部を除き、縄文施文のみによる羽状縄文からの菱形構成は少なく斜縄文が主体である。この点はD・J地点住居跡出土土器の傾向と一致する。先述の川崎遺跡1号住居跡出土土器は、上福岡貝塚1号住居跡出土土器(第115図5・6)の器形と酷似するが、明確な羽状縄文による菱形構成を配する。第1類土器群の有尾式土器など、工具施文土器の爪形文の有無などと合わせ、川崎遺跡第4次調査出土土器群との関係は非常に興味深い。

第4類土器群で貝殻腹縁文の土器は底部1点のみで、他は全て貝殻背圧痕文である。第115図2は貝殻背圧痕とR1縄文を施文する点で特殊といえる。第4類土器群と他の土器群との出土状況による時期差などは確認できなかった。

施文方法や文様以外では、土器製作を途中で終了したような器形の土器が目立つ。ただし縄文などの文様は施文され完成品として使用されている。第115図2、第116図10・11・79は胴部から短い頸部を経て口縁部に至る。本来はさらにもう1～2段の粘土紐の積み上げ後、追加成形技法などにより第116図9のような器形になるものと考えられる。施文は貝殻背圧痕や付加条縄文などが多くみられる。

(2) 2号住居跡出土土器について

2号住居跡出土土器は総数348点、復元可能な個体数は4点(第128図)と1号住居跡に比べ少ない。

2号住居跡で主体を占めるのは、1号住居跡同様に第2類第1種と第2種の地文に無節や単節縄文を施文する土器群、第4種の付加条縄文を施文する類である。2号住居跡の特徴は、第1類土器群と第4類土器群がほとんどみられず、僅かに出土する破片も攪乱出土や表土層出土のもの他に覆土上層出土で、総量に占める割合を考慮しても少ない。時期的なものか、その他の要因に起因するのか貝層の形成要素と合わせて考える必要がある。

第128図2は1・2号住居跡の復元可能土器のなかで、羽状縄文による菱形構成を確認出来る唯一の個体である。本地点の出土土器は羽状縄文を施文するものは若干みられるが、全体で菱形を構成するものは極端に少ない。

第128図1と3は、土器上半の施文手法に共通性が

みられる。同じ縄文原体を異方向に回転施文し、縦位区画の「仕切り」を作り出す。3は無節R1斜縄文を地文に、4ヶ所(単位)で同じ縄文原体を条が縦位になるように施文する。1も器形は若干異なるが同様の手法で、条を縦位方向に施文する部分が2単位確認できる。両土器とも胴部下半では同方向の縄文のみで、異方向の縄文や区画は認められない。1、3の土器は偶発的または辻褃合わせに施文したものではなく、明らかに意図して計画的な単位として施文している。本文では第2類第1種としたが第2類第3種異条斜縄文の土器としても良い類である。

口縁上部の縦位区画の構成は、関山式から黒浜式や有尾式土器にみられるが、縄文原体の回転方向や原体自体を替えて文様構成に変化を与える手法は、羽状縄文の菱形構成の作出と共通しており黒浜式期の一様相なのか、または突起を4単位貼り付けるものや肋骨文など縦位区画の意識と繋がるものなのか、今後の検討課題としたい。

Ⅲ 今後の課題

1・2号住居跡が集落の最も南側に位置する事から、今回の調査では関山式土器は1点も出土していない。関山式期と黒浜式期では集落の配置が異なることが改めて確認されたと言えるが、集落全般について現段階では十分な検討を加えることは難しく、今後の調査に期待したい。

1・2号住居跡の貝層から出土した動物遺体は、出土状況や貝類の組成などが全く異なる様相を呈していた。山内博士の調査による動物遺体のサンプルとの比較では、種類の大きな違いは見られなかったが、当時の写真などを見ると、かなりの規模の貝層がみられその様相は多種多様であったと考えられる。1・2号住居跡の各貝層間の問題や動物遺体を含めた周辺の自然環境などについては、川崎遺跡など周辺の遺跡も含めて改めて検討を行ないたい。

今回の出土土器については、ほぼ黒浜式と有尾式に限定されることから、古入間湾沿岸における一括資料として貴重である。今後は1937年の出土土器や、川崎遺跡や水子貝塚など周辺遺跡出土土器群との関係をより深くみていきたい。上福岡貝塚を語る上で必ず問題となる、山内清男博士が実績報告でとりあげた「～別型式二属スラシイ」土器群の問題については、新発見も無いことから今回は取上げて触れなかった。石器に

についても全く触れることが出来なかった点も含め、今後の研究・検討課題としたい。

最後に上福岡貝塚第1地点出土の縄文土器について、新井和之氏、黒坂禎二氏、下村克彦氏、鈴木徳雄氏、高野博光氏、田中和之氏、早坂廣人氏、山口逸弘氏をはじめ多くの方々から貴重なご助言とご指導をいただきました。また国立奈良文化財研究所埋蔵文化財セン

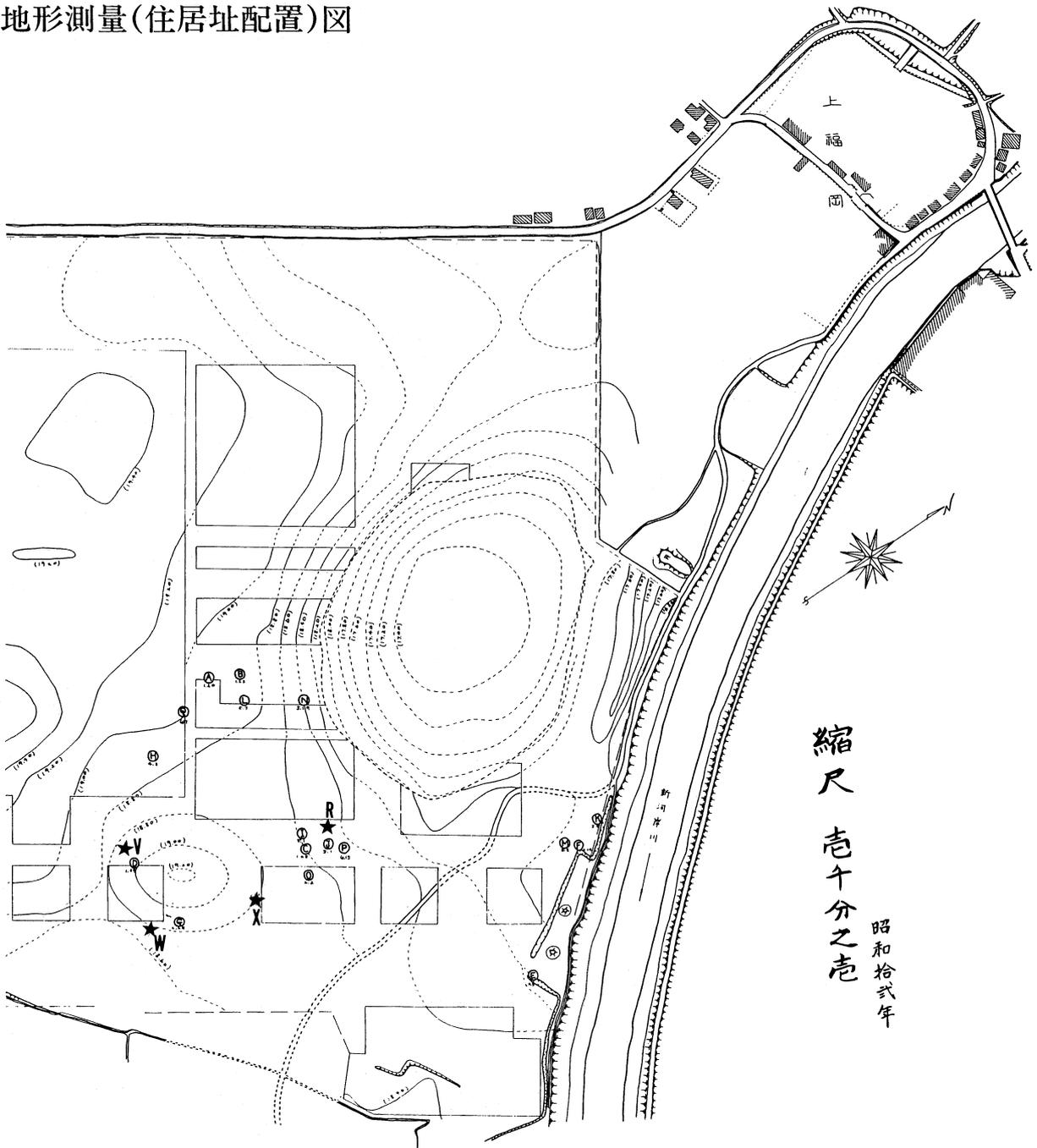
ターの小澤毅氏には山内清男考古資料の見学についてご配慮を賜りました。記して感謝申し上げます。

(鍋島直久)

註(9) 上福岡市教育委員会1994『考古文献資料(1)上福岡貝塚』市史調査報告第5集 P.L.29図に加筆

註(10) 川名広文1997「この人と語る・上福岡貝塚の発掘」『きんもくせい』市史研究第三号 上福岡市教育委員会

地形測量(住居址配置)図



※本図は1/1,000の原図を1/4に縮小し、1/4,000として再トレースしたものに、山内図よりR、V、W、X地点住居跡を加筆。

第176図 上福岡貝塚地形測量(住居址配置)図

第92表 川崎遺跡縄文時代前期住居跡一覧表

(単位cm)

住居番号	調査年度	調査名	調査率	平面形 ()は推定	規模 ()は残存値	炉	貝層	周溝	総柱数 (主柱)	壁柱	主軸方位	時期	備考	文献
1J	1974	第1次L.N.03	2/3掘	ほぼ方形	420×380×14	○			11(11)		N-16°-E	諸磯a式		川崎遺跡第1次調査概報
2J	1974	第1次L.N.19	2/3掘	(長方形)	不明×550×12	○		○	35	(28)	N-42°-E	黒浜式	拡張住居	
3J	1974	第1次L.N.20	2/3掘	(長方形)	560×420×60	○2			29(8)	(11)	N-59°-E	黒浜式		
	1975	宅地添1次-A地区	完掘	不整形	330~390×430×25	○	○		45(8)		N-22°-W	黒浜式		郷土史料第27集
9J	1975	第2次L.N.08	1/2掘	(隅丸長方形)	?×570×?	○				○	N-88°-E	関山式・諸磯式	2軒重複?	川崎遺跡第2次調査概報
12J	1975	第2次L.N.25		長方形	?×450×?	○			42	○	N-68°-W	関山式	L21と複合しL29によって切られる	
10J	1975	第2次L.N.34	完掘	方形に近い	520×480×20				7		N-15°-W	黒浜式?縄文前期	L N16と複合	
11J	1975	第2次L.N.35	完掘	(隅丸長方形)	255×150×10				1		不明		L N06と複合	
13J	1975	第2次L.N.50	2/3掘	長方形	620×460×12	○			42	40	N-35°-W	関山式?		
4J	1975	第2次L.N.70	1/2掘	(隅丸長方形)	?×330×?				10		不明	黒浜・諸磯a式		
5J	1975	第2次L.N.73	完掘	隅丸長方形	350×260×?	○				○	N-6°-W	花積下層式?	複合住居	
6J	1975	第2次L.N.74	完掘	隅丸長方形	820×810×?	○					N-80°-W			
7J	1975	第2次L.N.76	完掘	隅丸長方形	390×290×?	○					N-10°-E			
8J	1975	第2次L.N.77	完掘	隅丸長方形?	?×?×?	○					不明			
14	1977	第3次7号住居跡	完掘	不明	?×?×?				14		不明	花積下層式?		郷土史料第21集
15	1977	第3次8号住居跡	完掘	(隅丸長方形)	(540)×470×10	○			14(4)		不明	花積下層式		郷土史料第24集
16	1979	第4次1号住居	完掘	隅丸長方形	645×505×40	○	○		37(8)		N-36°-E	黒浜式		郷土史料第24集
17	1979	第6次2号住居1A	一部	不明	不明	○	○	○	12		不明	黒浜式?	1B・1C住居重複	郷土史料第24集
18	1990	第14次1号住居	完掘	(隅丸長方形~長方形)	(470)×425×(10)	○3	○		52(10)	○	N-52°-E	関山式		郷土史料第41集
19	1995	第16次大型住居跡	完掘	隅丸長方形	1287×862×?	○2			6		N-45°-E	黒浜式	大型住居	「川崎遺跡第16次の調査説明会資料」 「私たちの埋蔵文化財」
	1999											関山式		

第93表 上福岡貝塚縄文時代前期住居跡一覧表

(単位cm)

新住居番号	調査年度	調査名	調査率	平面形 ()は推定	規模 ()は残存値	炉	貝層	周溝	総柱数 (主柱)	壁柱	主軸方位	時期	備考	文献
A	1937	A												
B	1937	B												
C	1937	C	C-1	完掘	隅丸矩形	500×440×70	○	(○)	○	29 6	○	N-56°-E	黒浜式	拡張有
			C-2	完掘	隅丸矩形	620×530×70	○	(○)	○	29	○	N-56°-E	黒浜式	
D	1937	D	D-1	完掘	隅丸不整形	350×500×100	○	(○)	○	85	12	N-43°-E	黒浜式に近いもの	拡張有
			D-2	完掘	隅丸不整形	420×560×100	○	(○)	○	85 4		N-43°-E	黒浜式に近いもの	
			D-3	完掘	隅丸不整形	400×580×100	○	(○)	○	85 4		N-43°-E	黒浜式に近いもの	
			D-4	完掘	隅丸不整形	560×600×100	○	(○)	○	85 4		N-43°-E	黒浜式に近いもの	
			D-5	完掘	隅丸不整形	570×600×100	○	(○)	○	85 4		N-43°-E	黒浜式に近いもの	
			D-6	完掘	隅丸不整形	650×600×100	○	(○)	○	85(6)		N-43°-E	黒浜式に近いもの	
			D-7	完掘	隅丸不整形	760×600×100	○	(○)	○	85(6)		N-43°-E	黒浜式に近いもの	
			D-8	完掘	隅丸不整形	750×600×100	○	(○)	○	85(6)		N-43°-E	黒浜式に近いもの	
E	1937	E												
F	1937	F	1/3掘	(長方形)	(400)×(320)×70	○	(○)	○	19 6	○	(N-40°-W)	黒浜式		
G	1937	G	1/2掘	(隅丸台形)	(500)×(340)×70	○2	(○)		16(4)	○	(N-26°-E)	黒浜式		
H	1937	H												
I	1937	I	I-1	完掘	隅丸矩形	510×420×80	○	(○)	○	45 4		N-54°-E	黒浜式	拡張有
			I-2	完掘	隅丸矩形	570×470×80	○	(○)	○	45(6)	15	N-54°-E	黒浜式	
J	1937	J												
K	1937	K	1/2掘	(長方形)	(690)×(290)×60	○	○	○	37 6		N-49°-W	関山式		拡張有
L	1937	L												
M	1937	M												
N	1937	N												
O	1937	O												
P	1937	P												
Q	1937	Q												
R	1937	R												
S	1937	S												
T	1937	T												
U	1937	U												
V	1937	V												
W	1937	W												
X	1937	X												
1	2007	1号住居跡	2/3掘	(隅丸長方形)	(585)×546×60	○	○	○	12 6		N-75°-E	黒浜式	拡張の可能性有り、X住の可能性有り	市内遺跡群4
2	2007	2号住居跡	完掘	(台形)	380×380×32	○	○		5 3		N-46°-W	黒浜式	X住の可能性有り	



上福岡貝塚第1地点近景



上福岡貝塚第1地点近景



上福岡貝塚第1地点試掘調査遺構確認状況



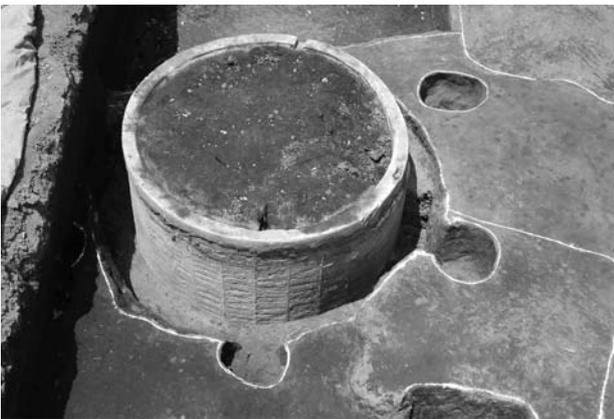
上福岡貝塚第1地点遺構確認状況



上福岡貝塚第1地点消火栓出土状況



上福岡貝塚第1地点消火栓配水管出土状況



上福岡貝塚第1地点水溜



上福岡貝塚第1地点水溜



1

←地上式双口型不凍消火栓



2

配水管刻印



2

配水管刻印



1

消火栓



1

消火栓刻印



1

消火栓刻印



2

配水管と乙型継手管



1

消火栓排水口



1

乙型継手管



1

乙型継手管刻印



上福岡貝塚第1地点集石土坑



上福岡貝塚第1地点集石土坑



上福岡貝塚第1地点全景



上福岡貝塚第1地点掘土層



上福岡貝塚第1地点調査前遺構確認状況(南東から)



上福岡貝塚第1地点全景(南東から)



上福岡貝塚第1地点1号住居跡



上福岡貝塚第1地点1号住居跡炉



上福岡貝塚第1地点1号住居跡土層



上福岡貝塚第1地点1号住居跡遺物出土状況



上福岡貝塚第1地点1号住居跡遺物出土状況



上福岡貝塚第1地点1号住居跡遺物出土状況



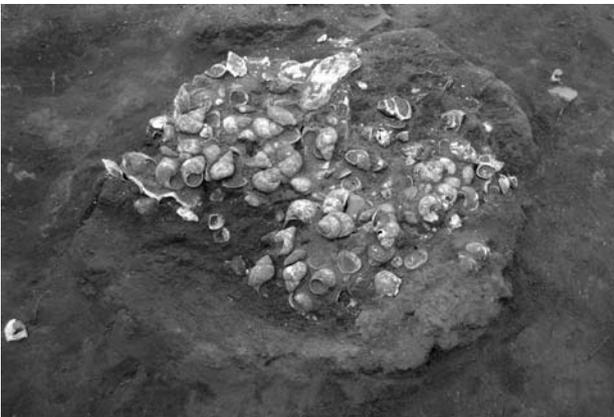
上福岡貝塚第1地点1号住居跡床面遺物出土状況



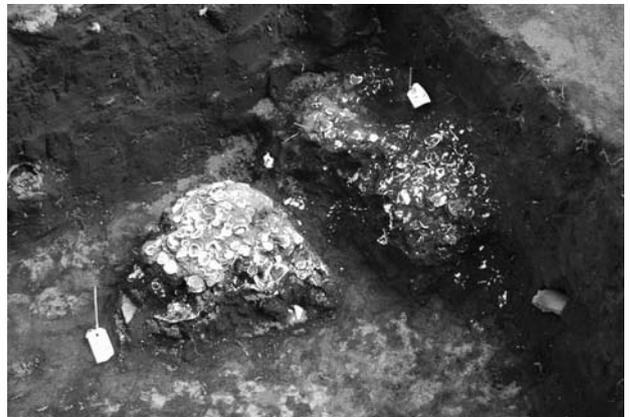
上福岡貝塚第1地点1号住居跡ピット5遺物出土状況



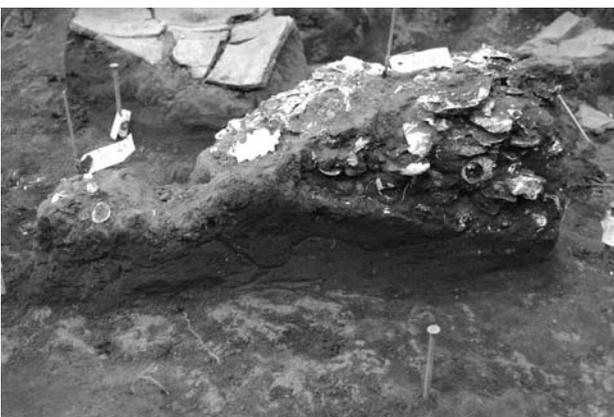
上福岡貝塚第1地点1号住居跡貝層1土層



上福岡貝塚第1地点1号住居跡貝層2オオタニシ出土状況



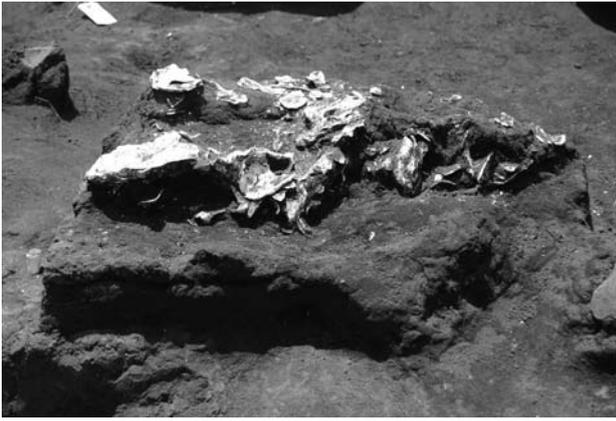
上福岡貝塚第1地点1号住居跡貝層1・2



上福岡貝塚第1地点1号住居跡貝層3・4土層



上福岡貝塚第1地点1号住居跡貝層5



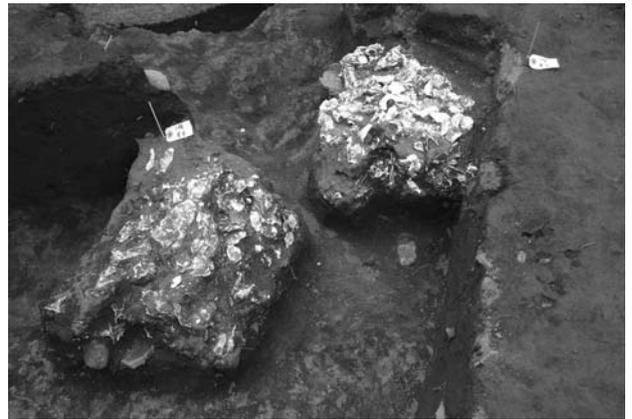
上福岡貝塚第1地点1号住居跡貝層6



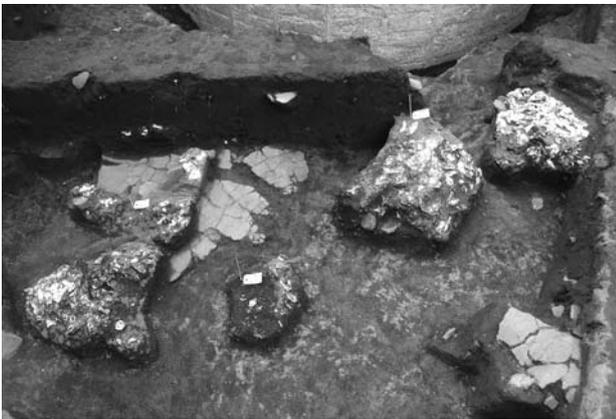
上福岡貝塚第1地点1号住居跡貝層7



上福岡貝塚第1地点1号住居跡貝層8・9



上福岡貝塚第1地点1号住居跡貝層8・9



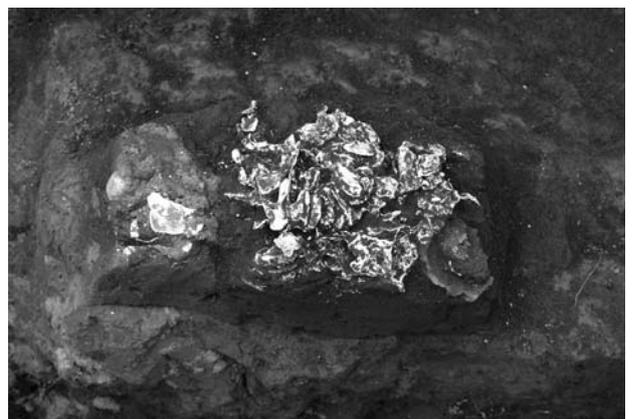
上福岡貝塚第1地点1号住居跡貝層10~12



上福岡貝塚第1地点1号住居跡貝層11



上福岡貝塚第1地点1号住居跡貝層12



上福岡貝塚第1地点1号住居跡貝層14



上福岡貝塚第1地点2号住居跡



上福岡貝塚第1地点2号住居跡炉



上福岡貝塚第1地点2号住居跡遺物出土状況



上福岡貝塚第1地点2号住居跡遺物出土状況



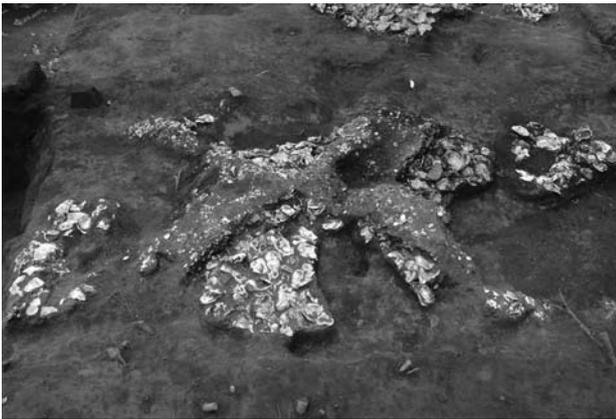
上福岡貝塚第1地点2号住居跡遺物出土状況



上福岡貝塚第1地点2号住居跡貝層Ⅰ



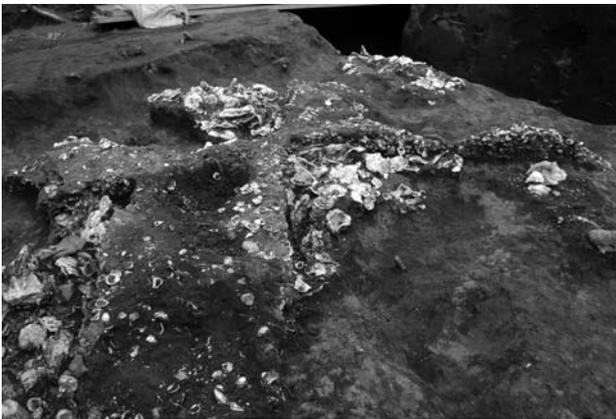
上福岡貝塚第1地点2号住居跡貝層Ⅱ



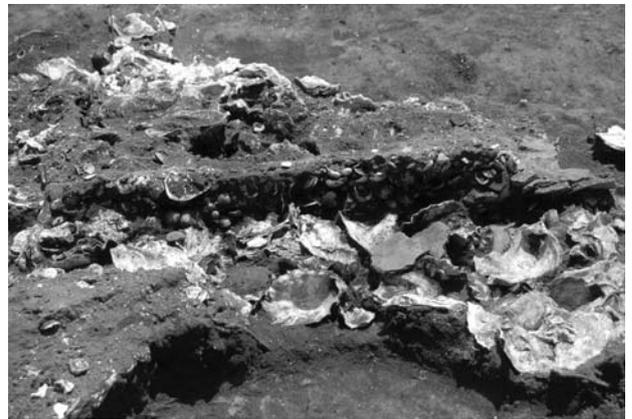
上福岡貝塚第1地点2号住居跡貝層Ⅱ



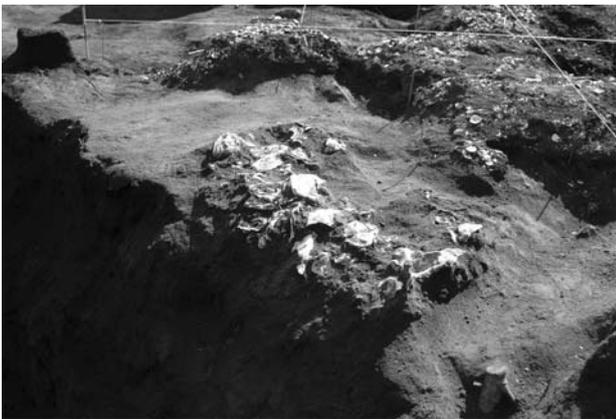
上福岡貝塚第1地点2号住居跡貝層Ⅰ～Ⅳマガキ①・②出土状況



上福岡貝塚第1地点2号住居跡貝層Ⅱ土層



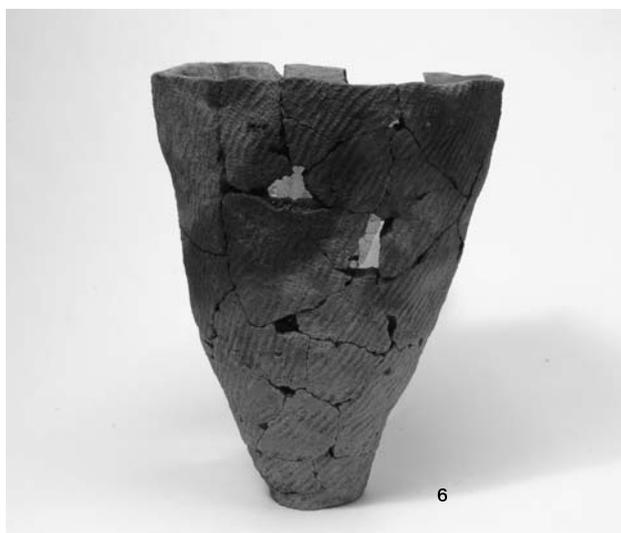
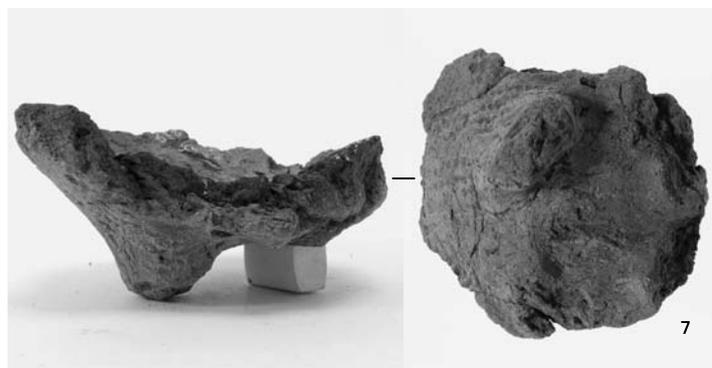
上福岡貝塚第1地点2号住居跡貝層Ⅱ土層



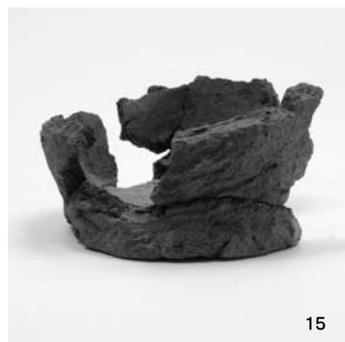
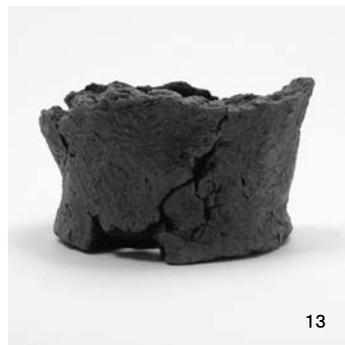
上福岡貝塚第1地点2号住居跡貝層Ⅲ



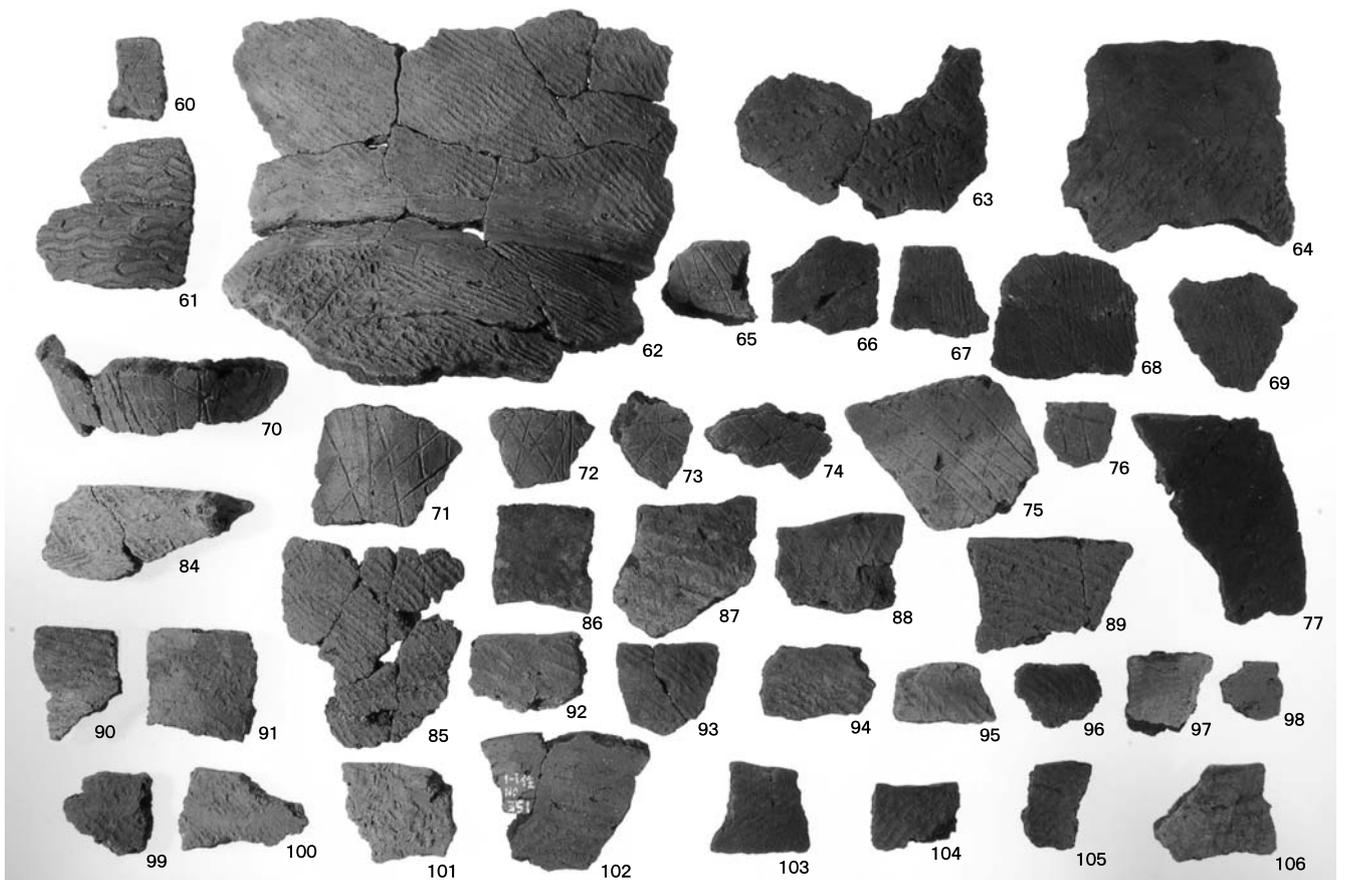
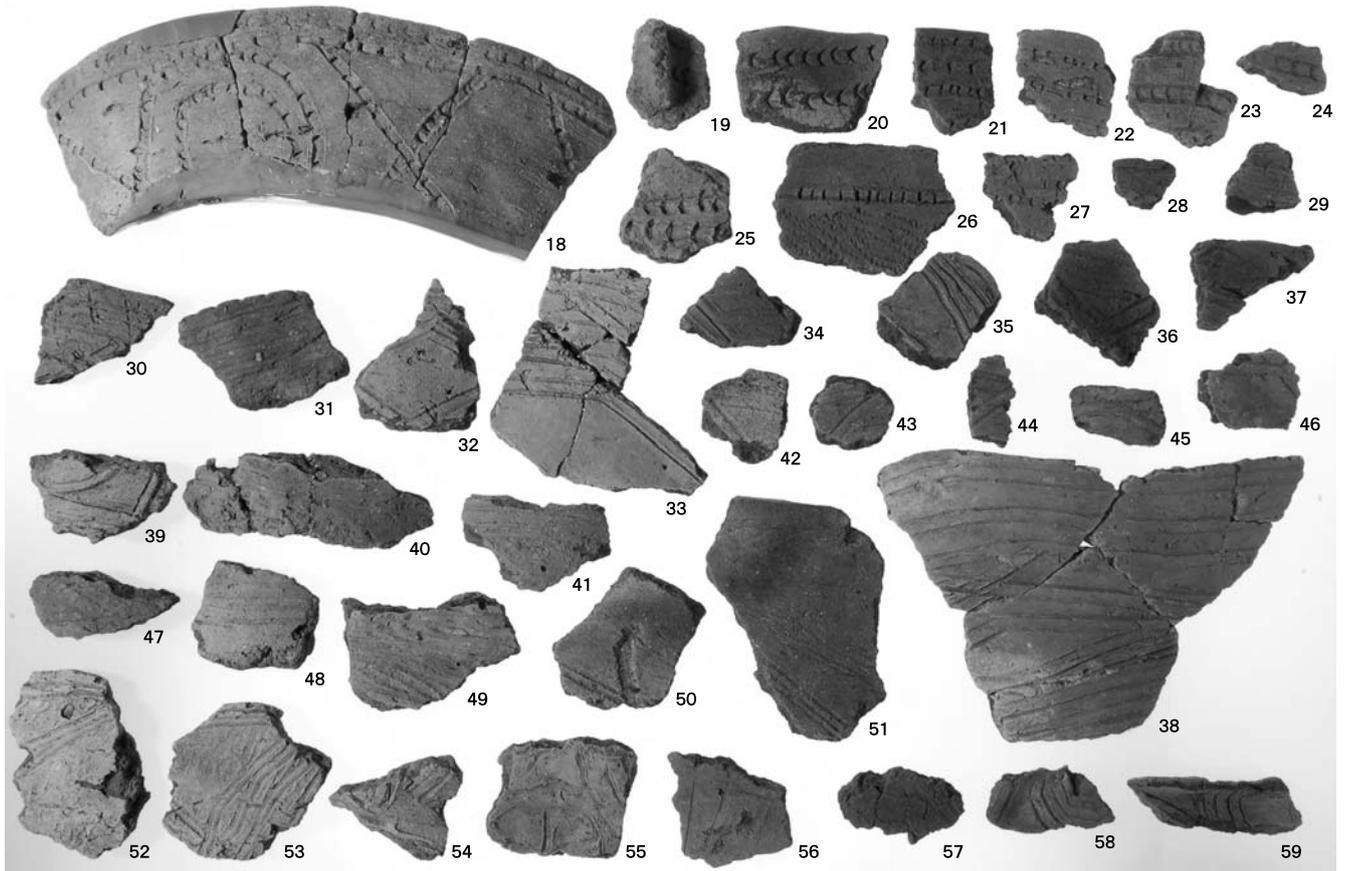
上福岡貝塚第1地点2号住居跡貝層Ⅳ



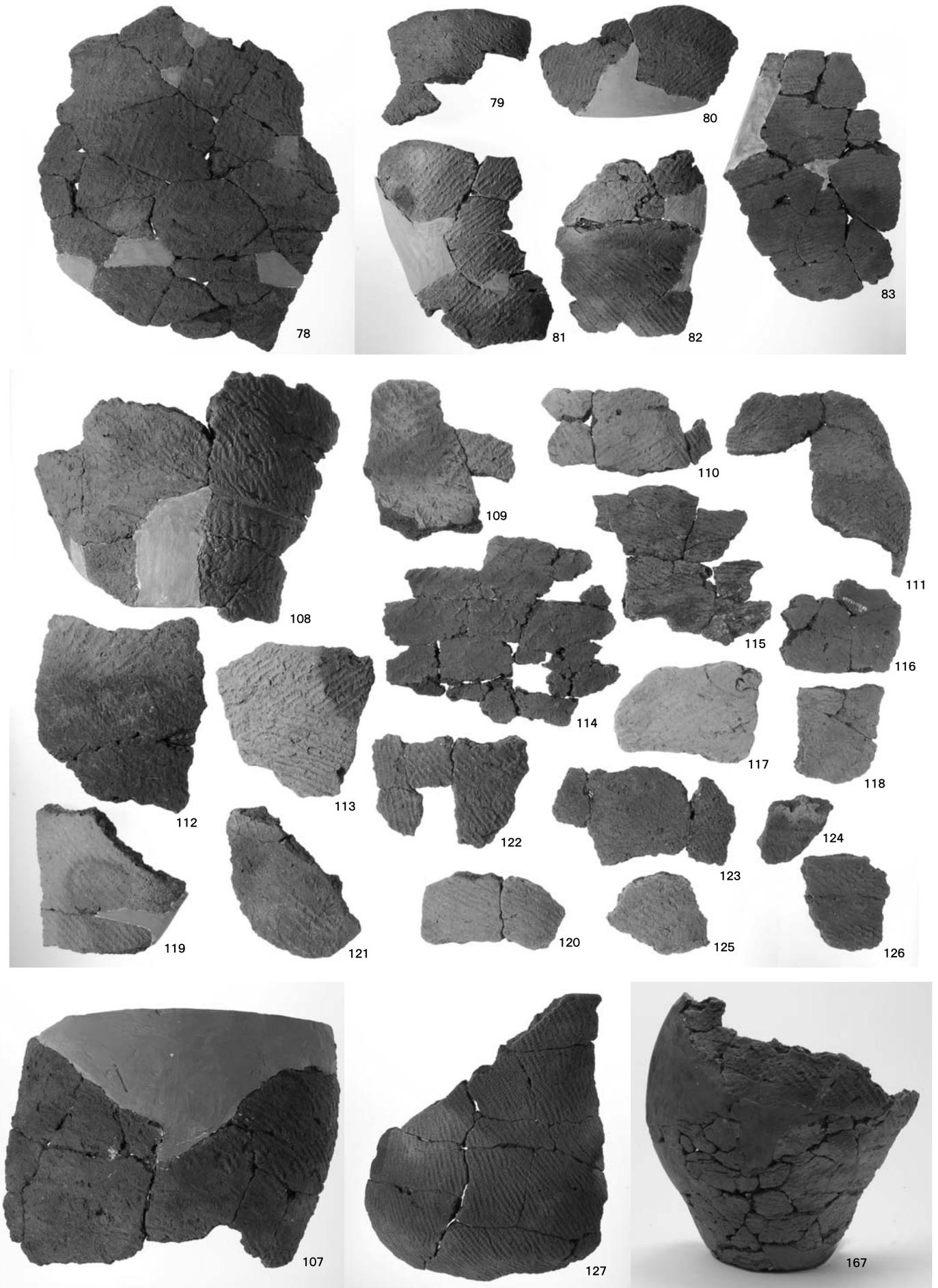
上福岡貝塚第1地点1号住居跡出土遺物No.1~8



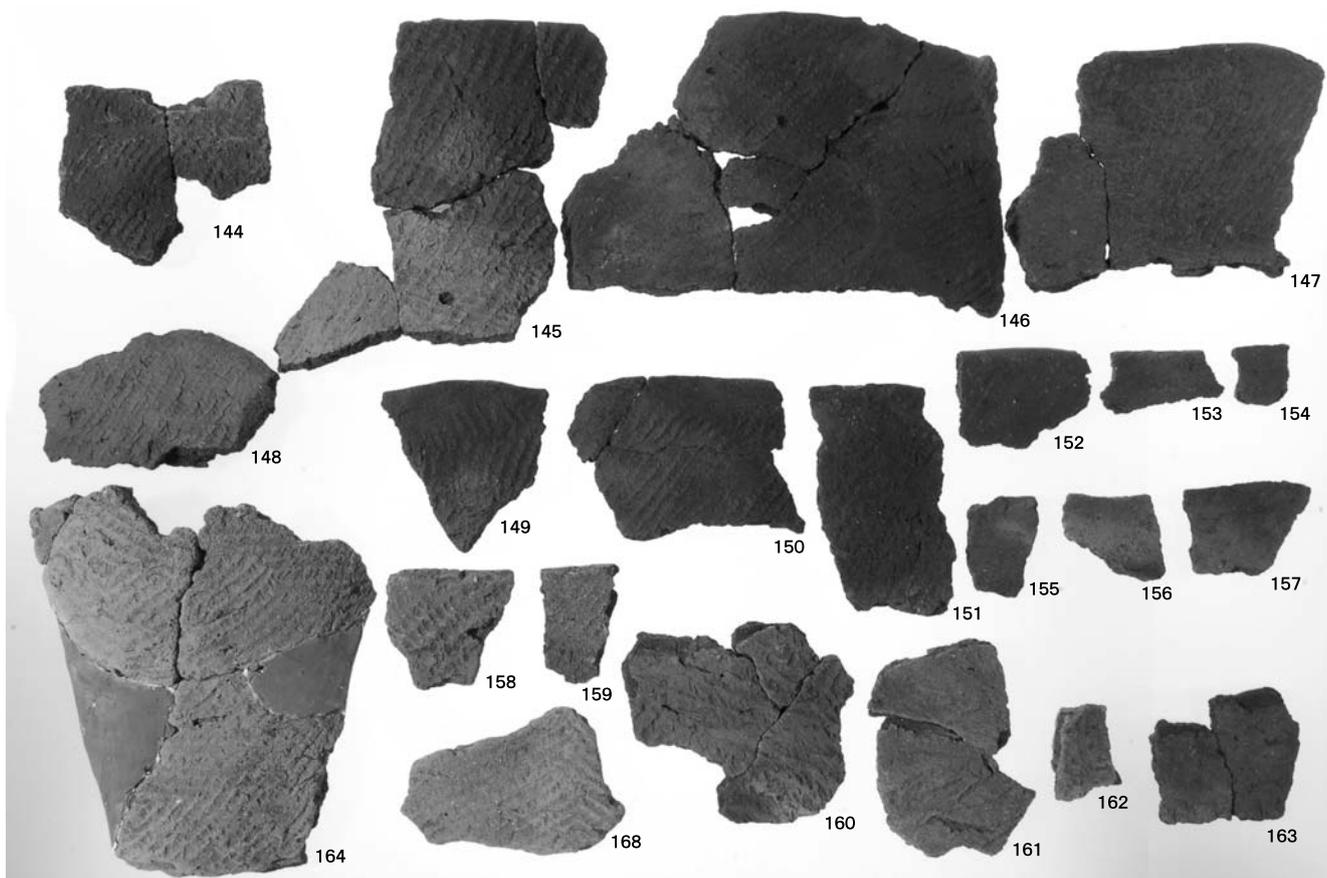
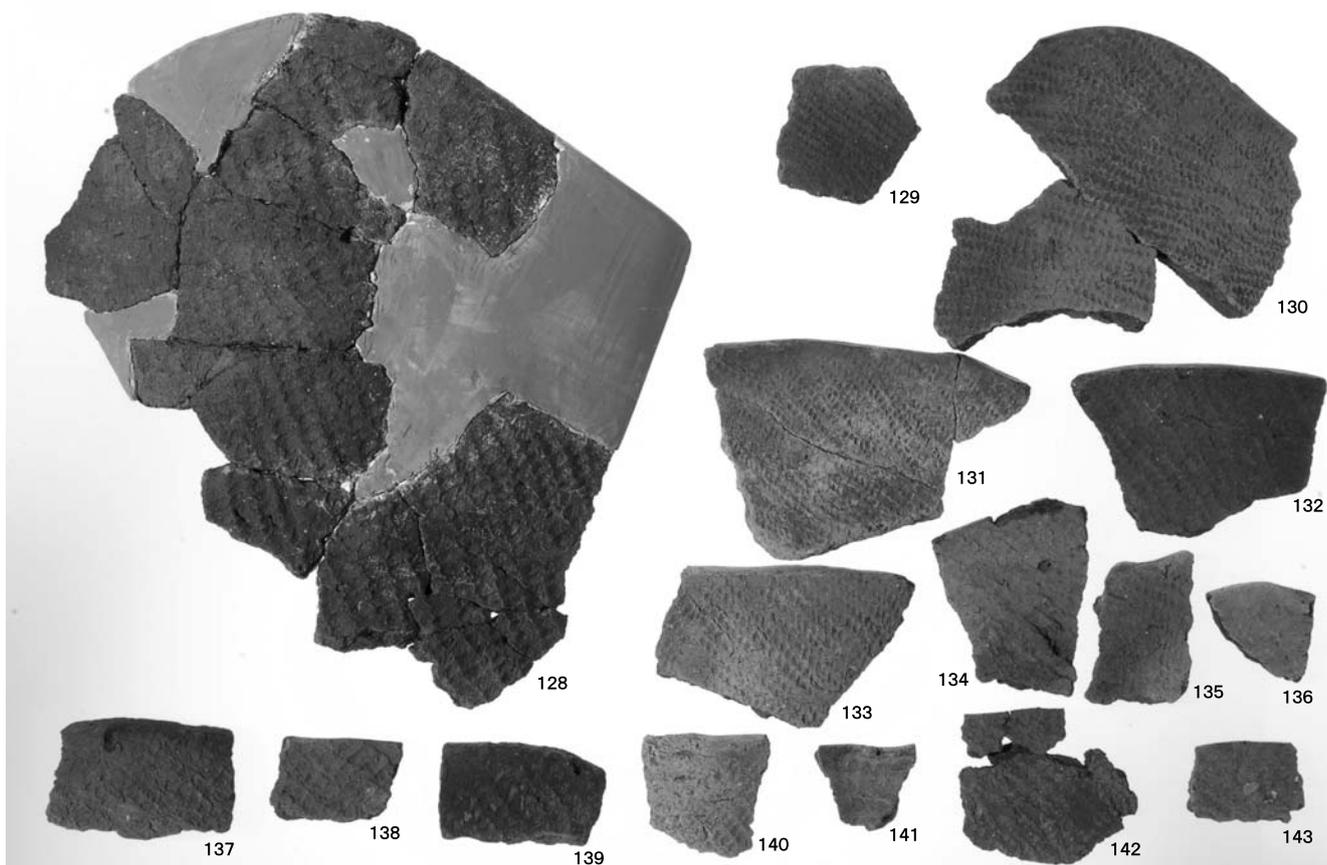
上福岡貝塚第1地点1号住居跡出土遺物No.9~17



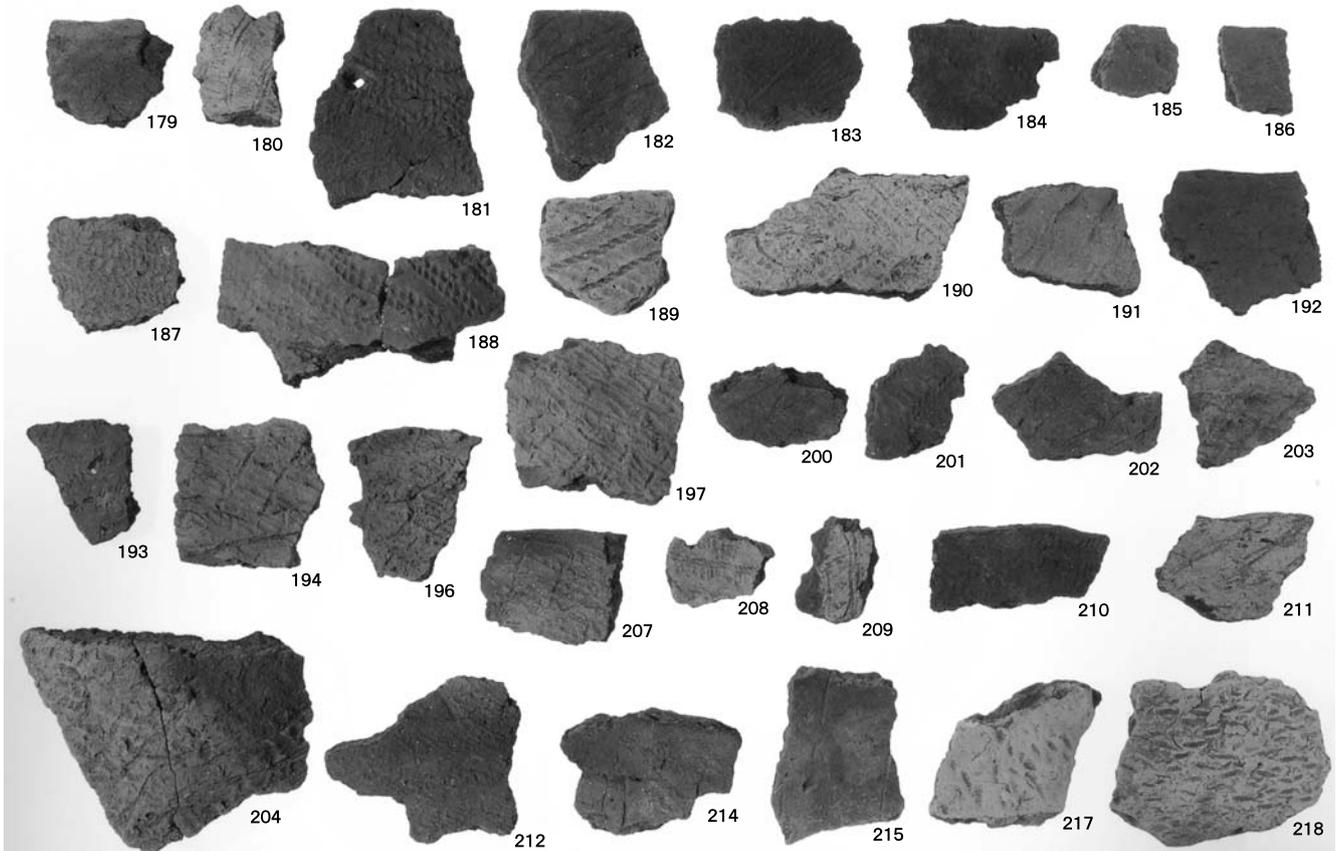
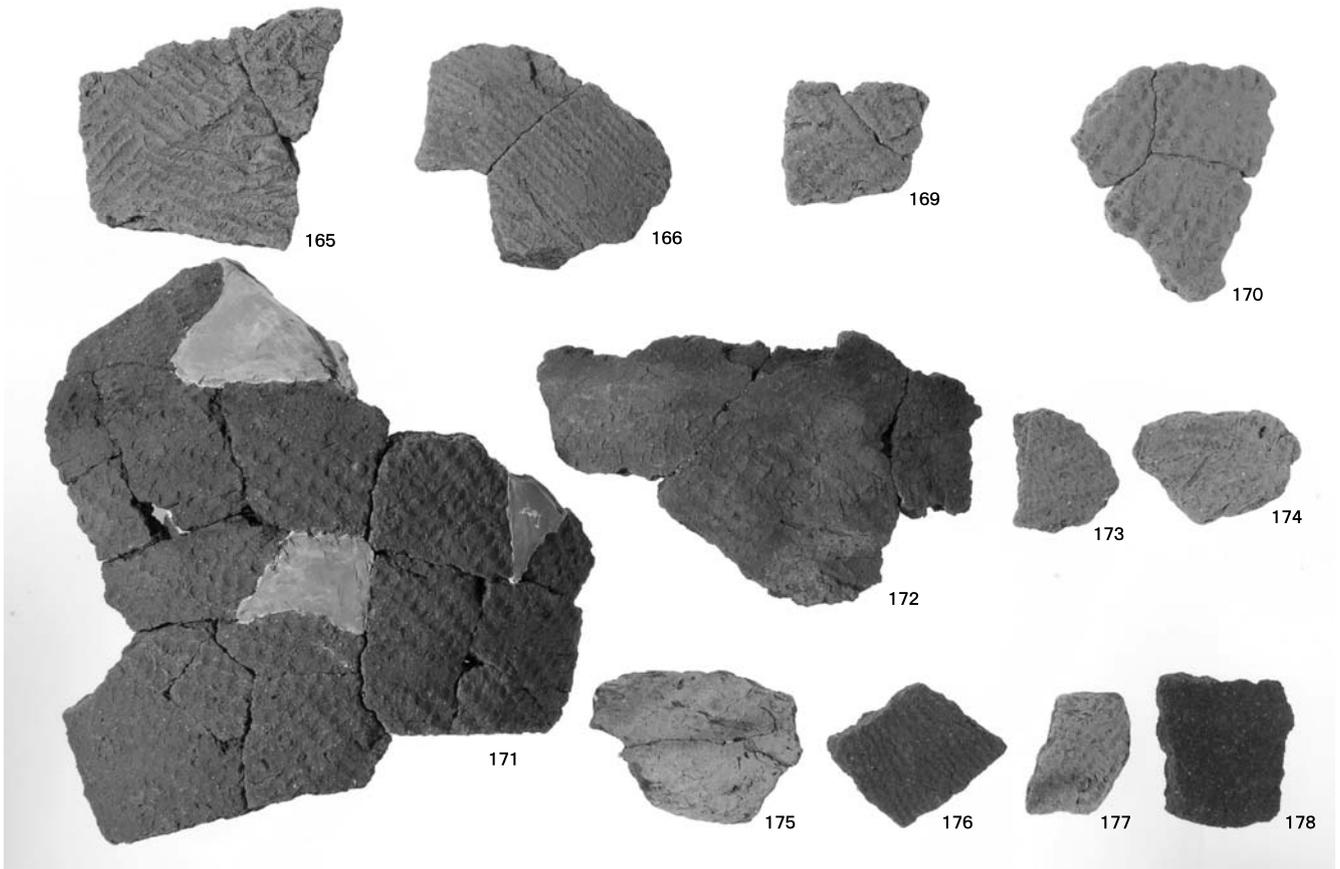
上福岡貝塚第1地点1号住居跡出土遺物No.18~77・84~106



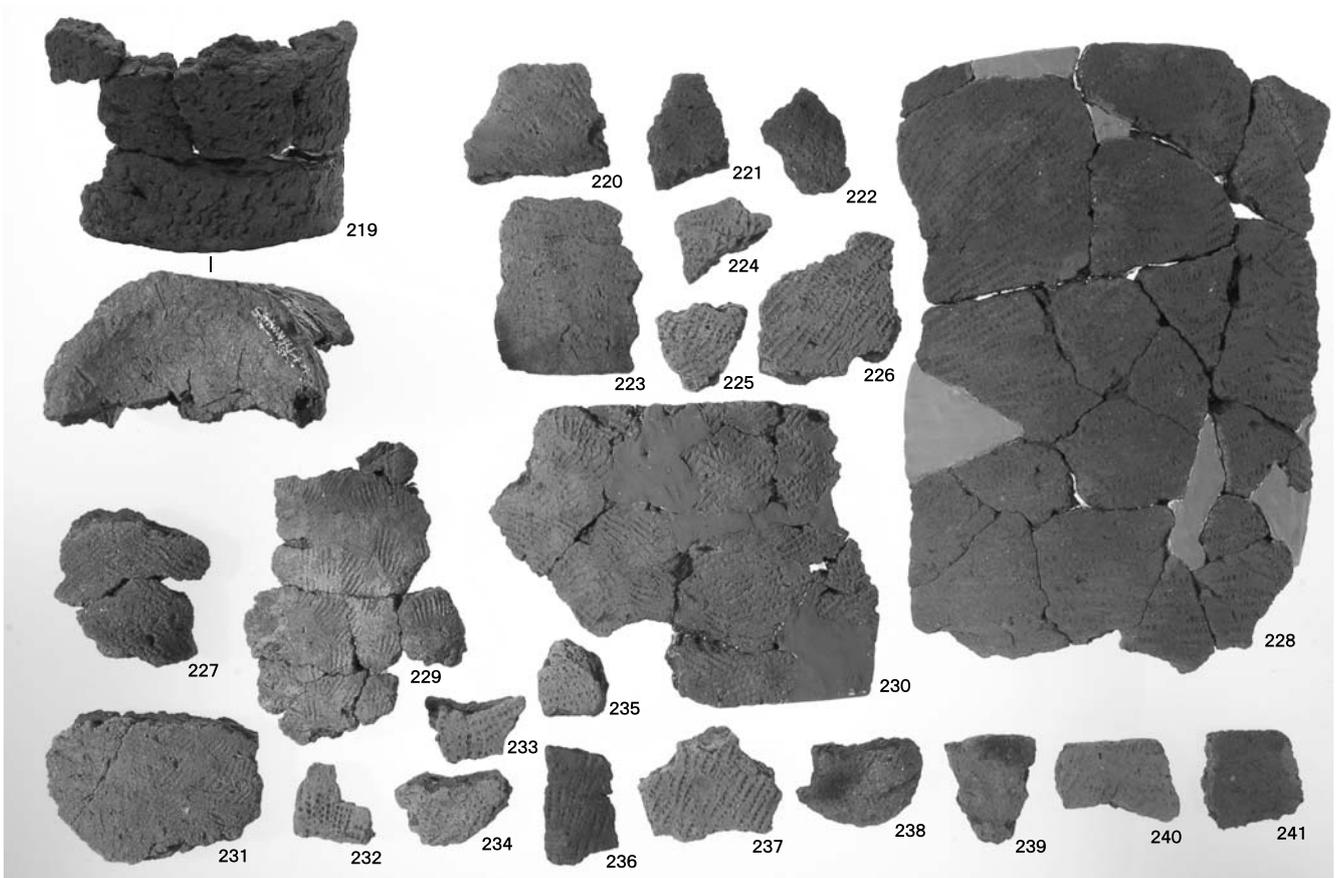
上福岡貝塚第1地点1号住居跡出土遺物No.78~83・107~127・167



上福岡貝塚第1地点1号住居跡出土遺物No.128~164・168



上福岡貝塚第1地点1号住居跡出土遺物No.165・166・169～194・196・197・200～204・207～212・214・215・217・218



上福岡貝塚第1地点1号住居跡出土遺物No.195・198・199・205・206・213・216・219～241



276



277



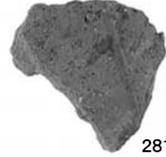
278



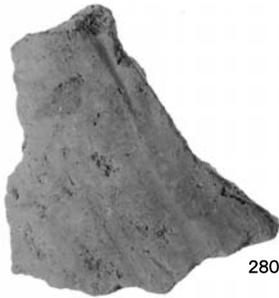
275



279



281



280



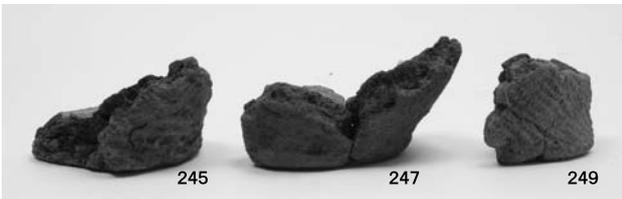
242



243



244



245

247

249



254

255

256



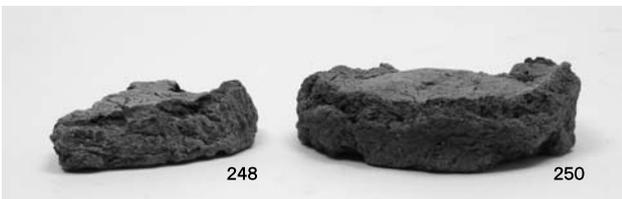
246



257

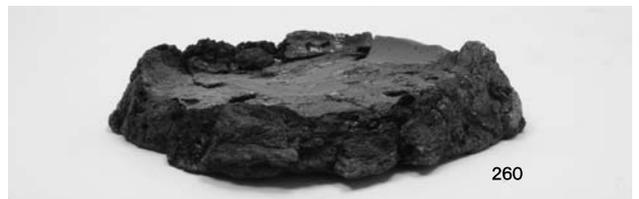
258

259



248

250



260



251

252

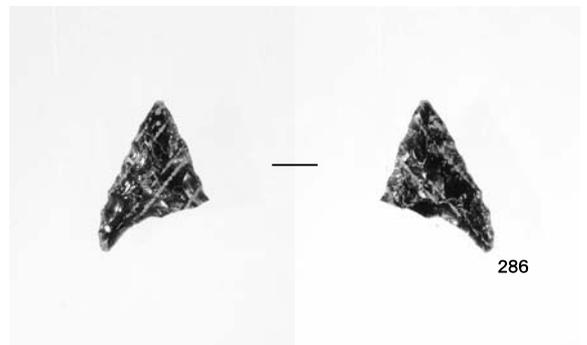
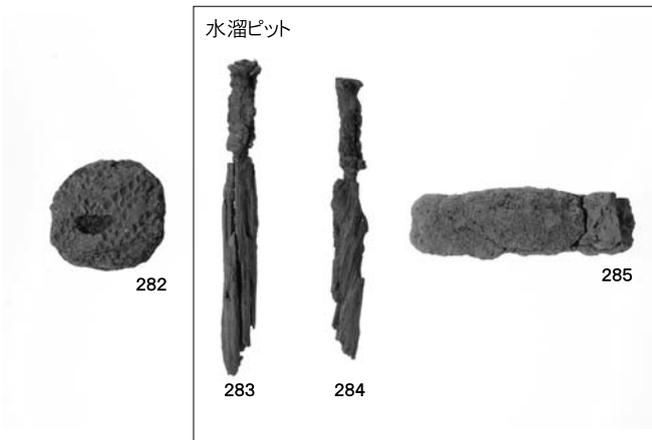
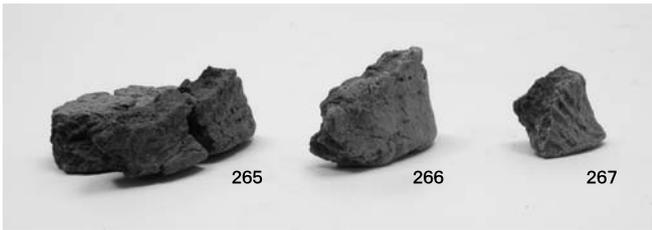
253



261

262

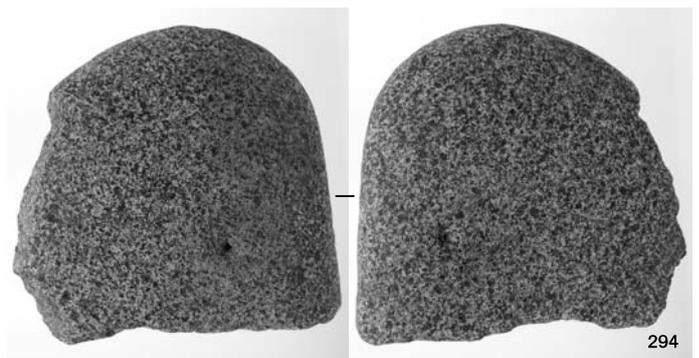
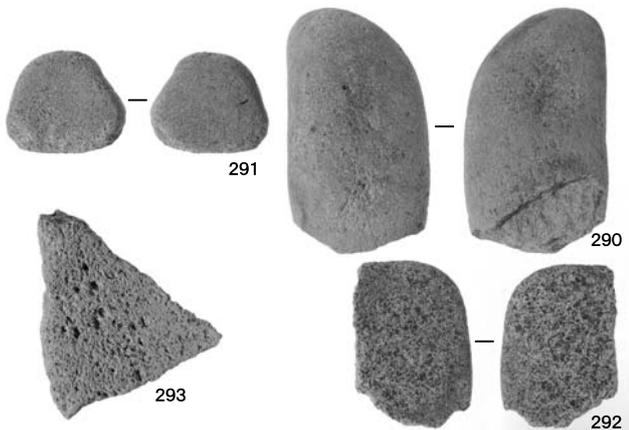
264



No.287~289(表面)



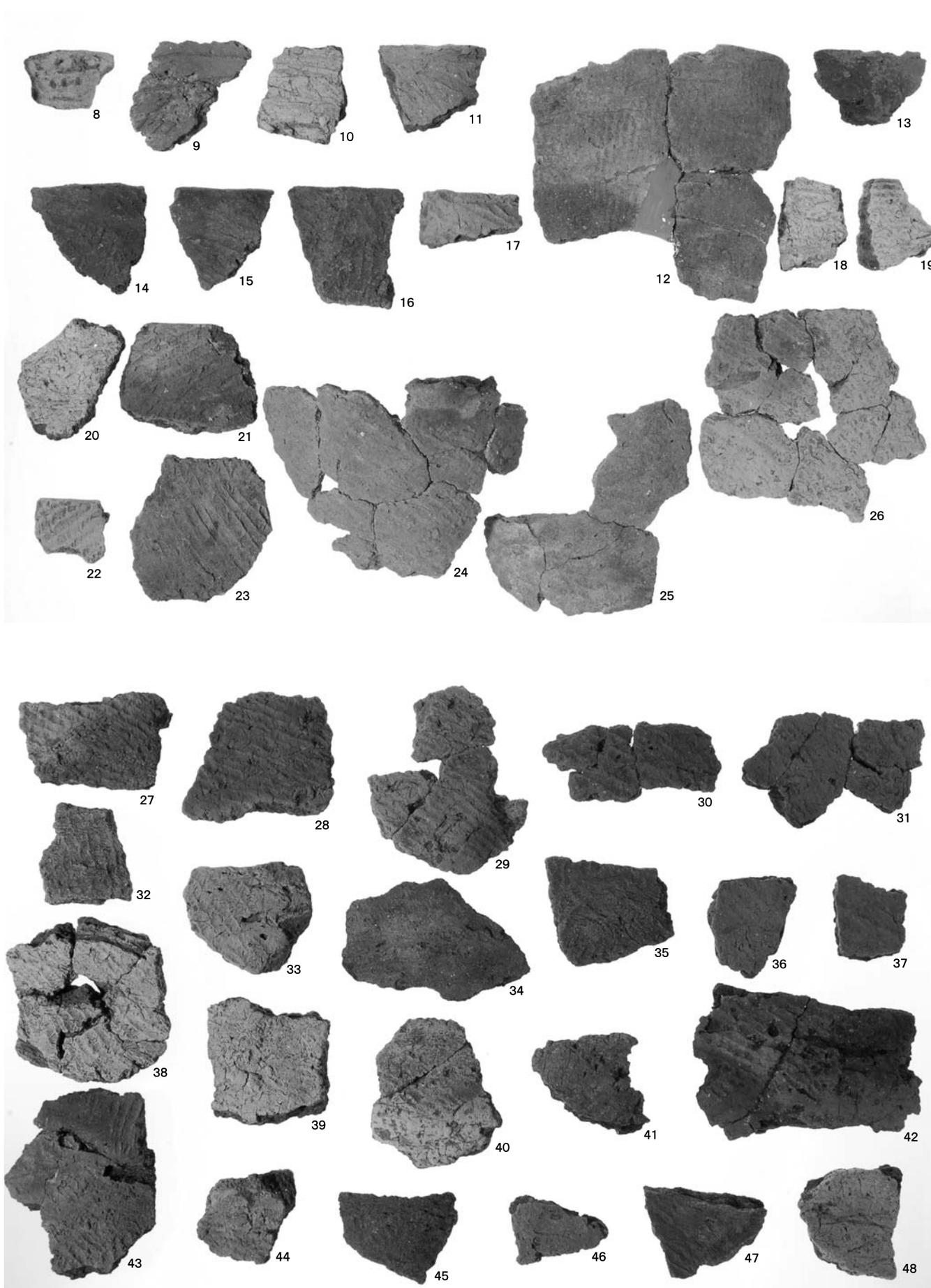
(裏面)



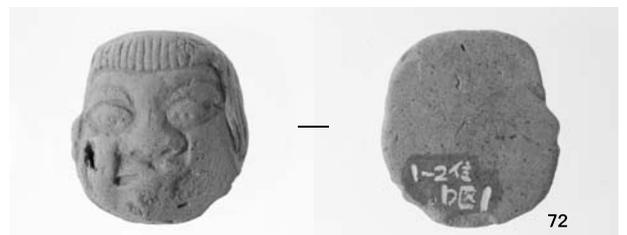
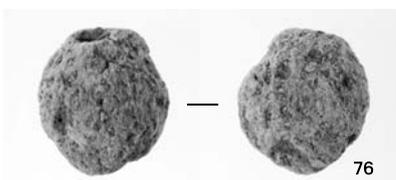
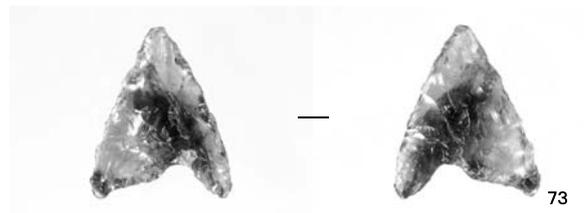
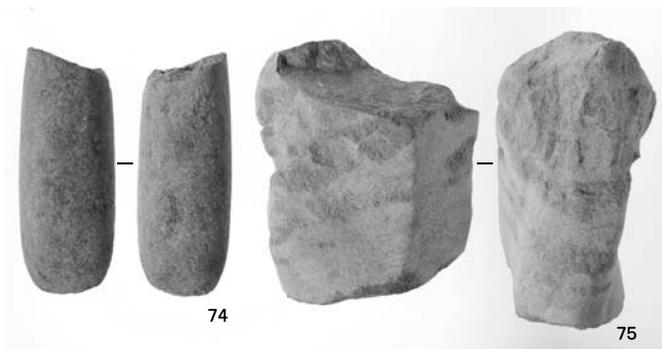
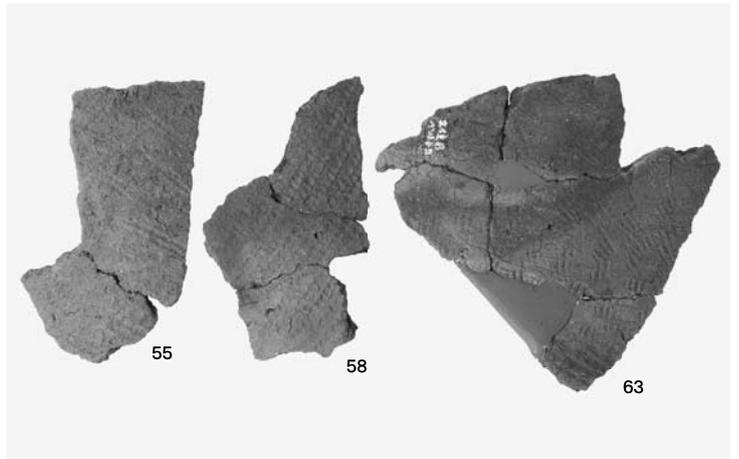
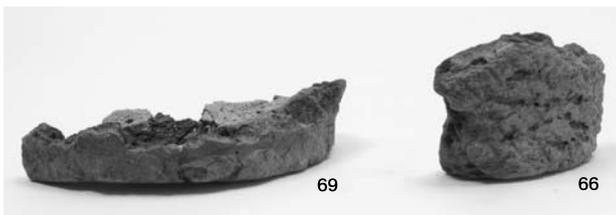
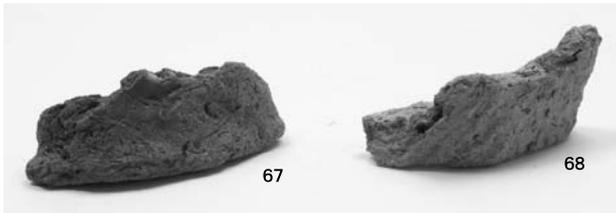
上福岡貝塚第1地点1号住居跡出土遺物No.263・265~274・282~294、水溜ピット出土遺物



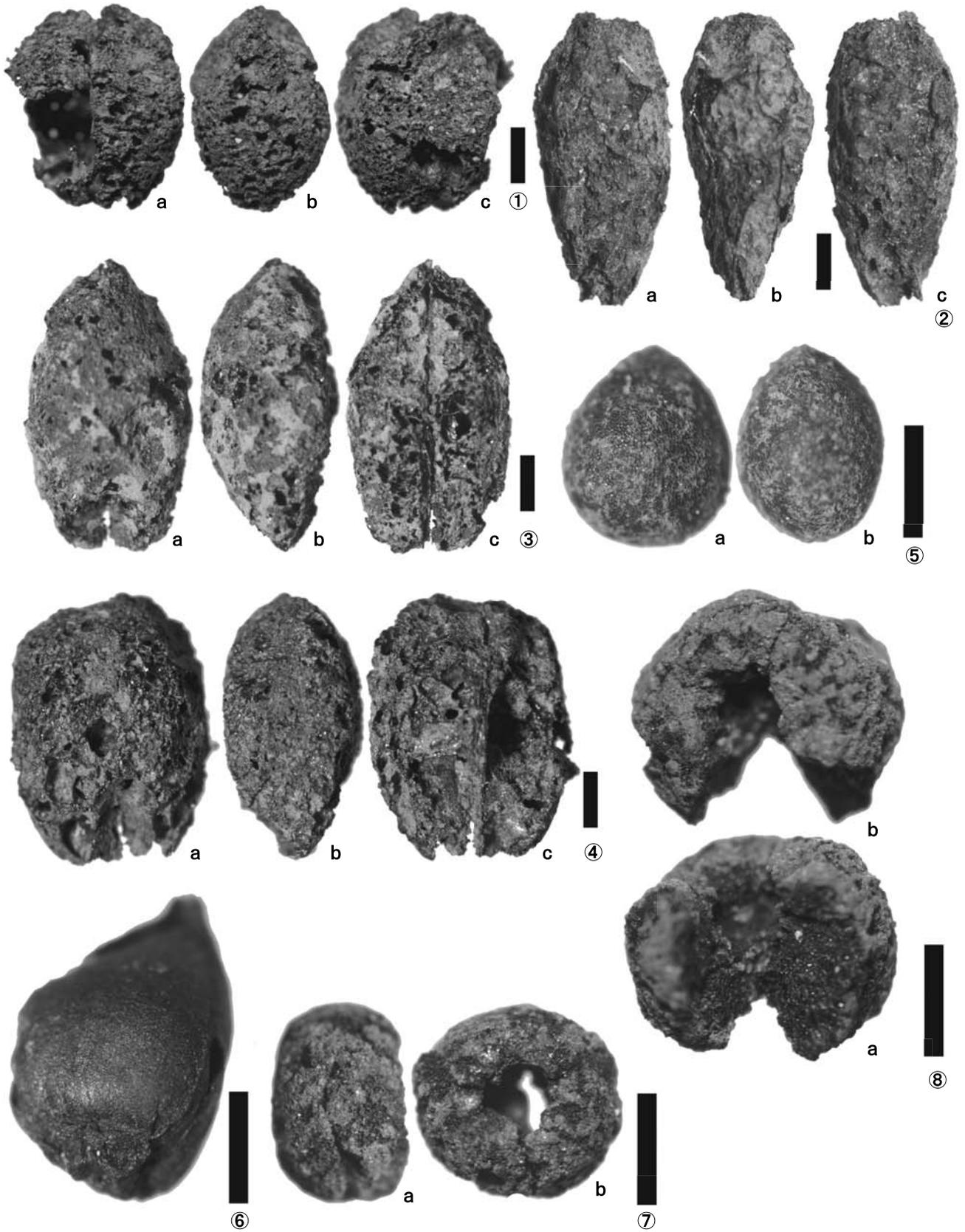
上福岡貝塚第1地点2号住居跡出土遺物No.1~7



上福岡貝塚第1地点2号住居跡出土遺物No.8~48



上福岡貝塚第1地点2号住居跡出土遺物No.49~76



- ①オオムギ 2号住居跡 貝層 I (1層)
- ②オオムギ 2号住居跡 貝層 I (4層)
- ③オオムギ 2号住居跡 貝層 I
- ④コムギ 2号住居跡 貝層 I (1層)

- ⑤涙滴型種子 2号住居跡 貝層 II
- ⑥タデ属 2号住居跡 貝層 V
- ⑦ビーズ状体 2号住居跡 貝層 II
- ⑧ビーズ状体 2号住居跡 貝層 V

黒棒は1mm、a, b, cは同一資料の異なった方向からの写真。



上福岡貝塚第1 地点1号住居跡遺物出土状況（南から）



上福岡貝塚第1 地点1号住居跡完掘（南から）



上福岡貝塚第1地点2号住居跡遺物出土状況（南から）



上福岡貝塚第1地点2号住居跡完掘（南から）



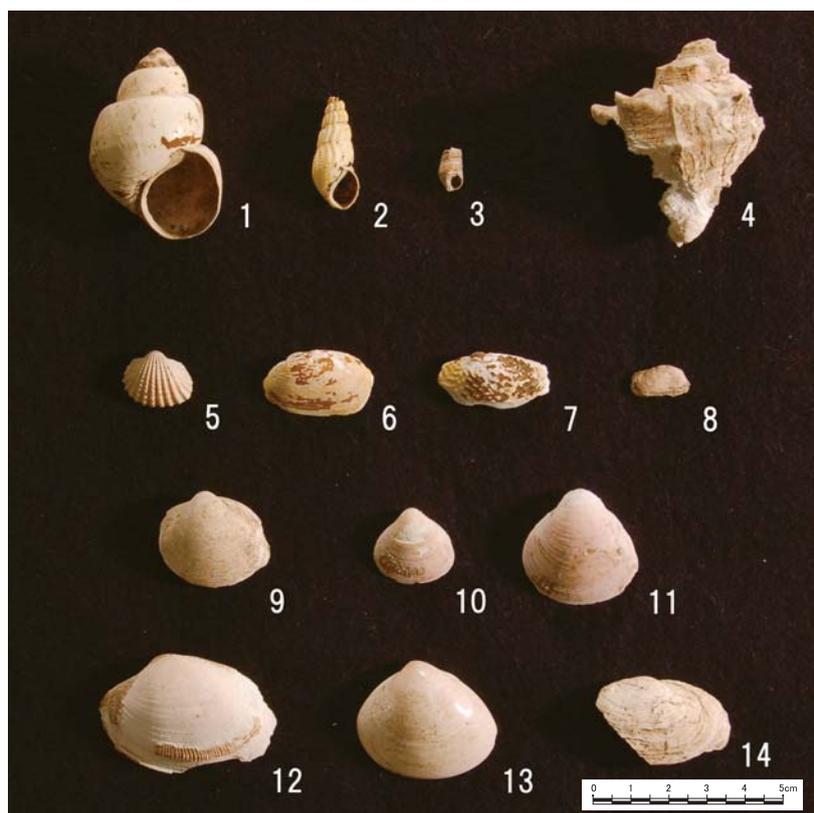
上福岡貝塚第1地点1号住居跡出土遺物①



上福岡貝塚第1地点1号住居跡出土遺物②



上福岡貝塚第1地点2号住居跡出土遺物



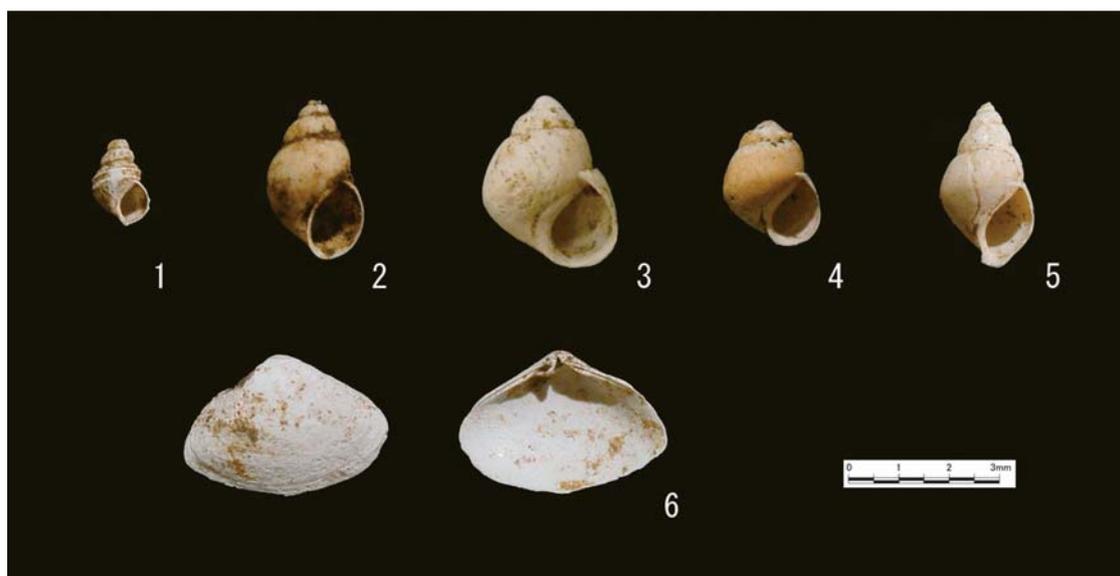
上福岡貝塚第1地点から産出した大型貝類遺体群

1: オオタニシ、2: チリメンカワニナ、3: ウミニナ類、4: アカニシ、5: ハイガイ、6: イシガイ、7: マツカサガイ、8: ウネナシトマヤガイ、9: シオフキ、10・11: ヤマトシジミ、12: アサリ、13: ハマグリ、14: オオノガイ

(*1・2・5~7・12~14: 1号住居跡貝層2、3: 1号住居跡貝層1、4: 1号住居跡貝層7、8・9: 1号住居跡貝層4、10・11: 2号住居跡貝層II)

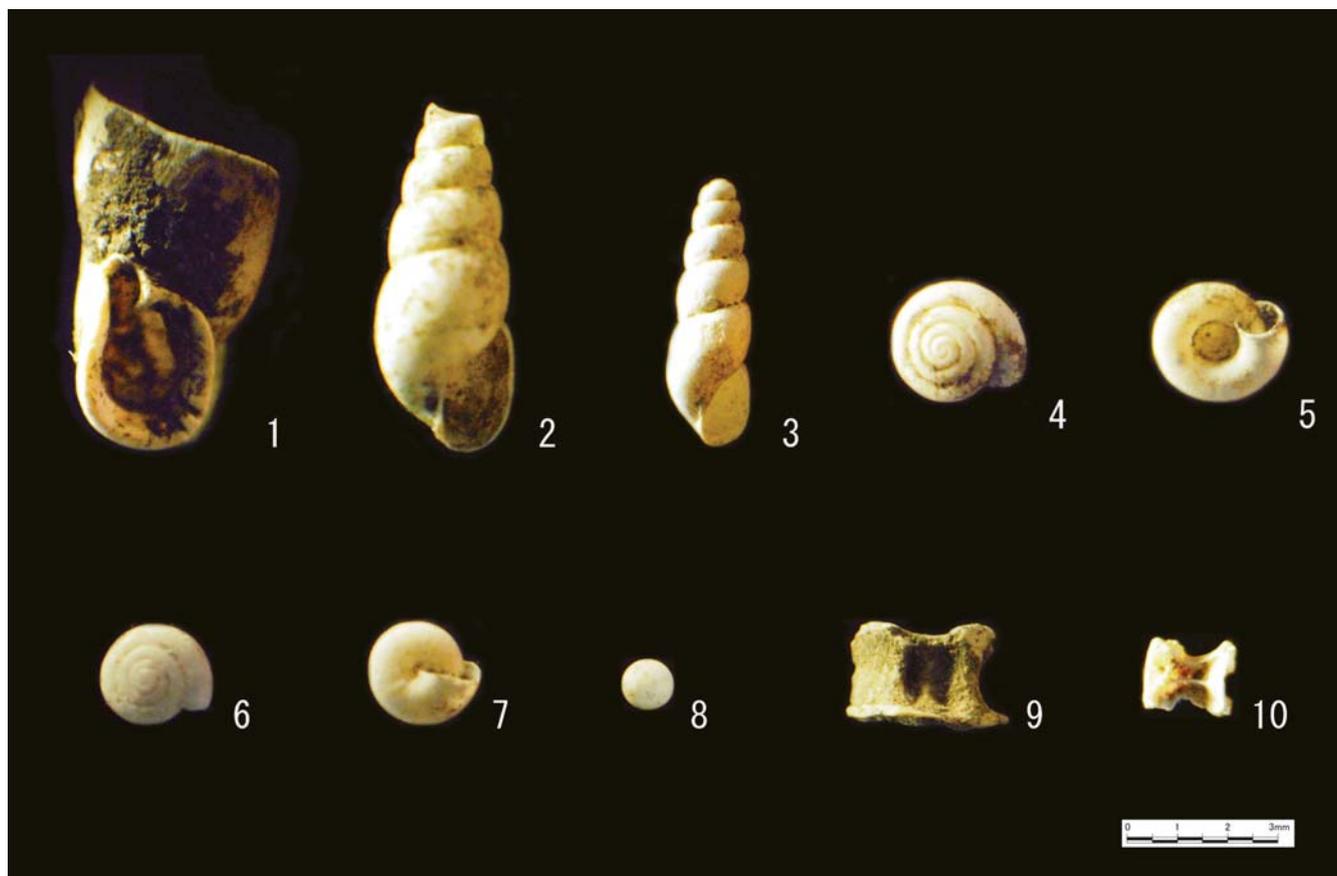


上福岡貝塚第1地点(2号住居跡貝層II)から産出したマガキ



上福岡貝塚第1地点から産出した主要な水生微小貝類遺体群

1: チリメンカワニナ幼貝(1号住居跡貝層12)、2: カワグチツボ(1号住居跡貝層2)、3: ヒラドカワザンショウ(2号住居跡貝層II)、4: ムシヤドリカワザンショウ(2号住居跡貝層II)、5: カキウラクチキレモドキ(1号住居跡貝層2)、6: ヒラタヌマコダキガイ(1号住居跡貝層2)



上福岡貝塚第1地点から産出した主要な陸生貝類遺体群及び脊椎動物遺体群

1: ヒカリギセル(1号住居跡貝層2・1層(東側))、2: オカチョウジガイ(2号住居跡貝層I・3層)、3: ホソオカチョウジガイ(2号住居跡貝層II C3・1層)、4: ヒメコハクガイの一種(表)(1号住居跡貝層2・5層)、5: ヒメコハクガイの一種(裏)、6: ヒメベッコウガイ類似種(表)(1号住居跡貝層2・1-3層・3層(西側))、7: ヒメベッコウガイ類似種(裏)、8: 陸生貝類・卵(1号住居跡貝層8・1層(東側))、9: エイ類椎骨(1号住居跡貝層9・1層(東側))、10: コイ科尾椎(1号住居跡貝層9・1層(東側))